

指導を完全且有効に終る様に企畫せねばならない。

第六章 學級の書方成績向上策

學校の書方成績を良好ならしめたいといふことは誰しも望むことである。しかも誰しも希望してやまないその成績向上が案外に進歩しないといふことは其の因那邊にあるであらうか。要するに私はその向上をはかるべき方案を存じないか。また存じながらも其の實行すべき根氣が缺けてゐるのではなからうかと思ふのである。そこで此章では小生の経験から書方成績向上の一方案を述べることにした。

先づ第一に教授者の具備すべき條件としては此科が好きであるといふこと。これが大切である。好きな學科には自然に力がある、結局兒童も教師の力のはいつた授業を受ければ兒童の成績もよくなつて来る。

教師が此科を愛好する様になるにはやはり相當に此科に習熟せなければならぬ。つまり教師の書寫能力が缺けてゐると自然いやになつて果ては自分の下手ばかりではない兒童も嫌になつて来る

のである。

現今の小學校に奉職されつゝある諸君を見れば大多數の人は皆相當に素質がよいものである。相當に素質がよくて今一息練習すれば能書になり得る人が自ら自身を卑下して自分は如何にしても上手にならないと棄ててしまふ人があるのである。

これは誠に惜しいことである。

然らば如何にして實力をつけるか。

- 1 教師は先づ其道の先輩に依頼して自分の筆蹟を見て貰ふこと。
そして其の中に癖あらばこれを極力矯正すること。
- 2 師につか或は斯道の先輩に自分の書風にあつた手本の選擇を依頼しこれによつて充分継続的に練習する
三日坊主はだめである。
- 3 平素間を見て練習することは勿論大切であるが練習するだけの時間のない場合は只手本を手にして見るだけでもない。
- 4 練習といふ譯でなくも書き物等依頼された場合等に喜んで書いてやること。結局より多く習字に親しむこと。

第二、教師の平素の心がけによつて實力がついたら次に教材について研究すること。つまり各教材について其の主眼點、其の教材の間架結構法運筆法、筆勢等について研究して「此處が力の入れ處」といふ點を調査し無駄のない指導をすること。

第三、下筆法、用筆法、文字の形等の書方教授用掛圖等を自製して教授時間は勿論、教授時間以外に於ても教室に掲示して一般兒童に觀させること。何れかと云へば此様に實際に習字の時間にて説明等するよりも平素の放課時に於て、兒童が知らず／＼に知識として印象されたものは記憶もたしかで非常に有効なものである。

第四、學級全部を同一歩調に成績の向上をはかることは勿論必要であるが、それ以外に學級中の數名を特に指導して力をのぼしそれによつて學級の標準兒童の眼識をたかめその五名なら五名を基準としてこれに習はせて級全體の成績の向上をはかるのである。

第五、書方は書方時間だけで彼等の腕をのばすものとは考へてはいけない。書方時間以外に他教科の學習時に於ける教師の板書文字よりうける感化は非常なものである。それ故に平素の板書文字は一層丁寧に書かなくてはならない。

第六、兒童の書方は發表の機會があらば其の機を逸せずにとし／＼させること。即ち展覽會は勿

論、父兄會、學校記念日、卒業式等何れの日もかまはず書かせて張出すがよい。以上のことに注意してなほ親切な指導、親切な成績物の處理法をとれば、成績向上は期してまつべきである。

第七章 學校の書方成績向上策

學校の書方成績向上策としては出來得る限りは職員全部が此科に得意であつてそして皆々熱心に指導するなれば別に茲に此項を設けて説述する必要はない譯である。處が各學校皆々書に堪能であるといふことはなかなか六かしい。何となれば現に師範學校の本科第一部が五年の修業年限中書方は三年までで打切になりしかもまた本科一年だけが毎週二時間宛であると二年三年は毎週一時間宛である。この様な有様では殆ど中學校等と同様で到底卒業後上手等といふまでにはいかないものである。ましてや中學校を卒業して僅か一年師範教育をうけて其間に一週一時間位の指導をうけて教育界に出る二部卒業生の如きは尙更拙い人が多いからである。

そこでその様な状態にある現今の小學校に於ては如何にして成績向上策をとるがよいであらうか
第一 私共其學校の職員中の能書のものを選んで二三名研究部員としてまた其學校の其科指導者として全職員に

先んじて努力させること。

つまり一人二人は其科の中心となり一面には犠牲的奉仕によつて大に書方の爲に努力させること。

第二 校長はその研究部に對しては其科については絶對的權威を持たしめて部員以外の職員は皆その部員を指導者として其の意見にしたがひ協力すべき處は協力しそして一致した努力によつて其學校の書方成績を進歩させるのである。

第三 校長及び職員とまた研究部員との間に圓滿な團結を見れば次に先づ全職員舉つて誰か穩健な書風のものを選び書道實習會を催すのである。この實習會をなす間に職員各自に文字を見る眼を養ふのである。つまり運筆の練習と同時に文字の鑑識眼批評眼を養ふのである。

第四 研究部ではこの腕をつくる練習會を開く一方には教科書の内容についての研究をせねばならない即ち各學年指導の系統、各學年教材の研究、これに伴つて教授用具の研究、同用掛圖等の皆々工夫製作して各教室に配り置くのである。そして學校として皆總ての方法皆この規範によらしめるのである。

第五 指導の方法、成績物の處理法更にまた獎勵法等を共同研究して以て一校として統一ある行動が必要なのである。

以上の方針によつて時々教員實習會、研究授業、作品展覽會等を行へば成績はいやが上にも上達するのである。

第八章 書方教授と實用化

書方教育と其の應用、これはなか／＼廣い。我々の生活上書寫することの多いだけ其の應用方面も範圍が大きいのである。で此の應用は出來得べきだけ多く實行せしむる必要があるのであるが、如何にしても僅かの時間のことであるから到底満足な實行も出來ないと思ふ。それ故實行も一通りなさしむると同時に、また一面それら應用方面の知識を興へねばならない。今その二三をあげて見ると次の様である。

第一 書翰文の認め方

一般の心得

1、字體 字體は行書またはわかり易い草書がよい、あまり崩してはよくない。

2、墨色と墨づき 墨色は普通濃いのをよいとしてゐる。只特例としては悔狀だけでこれは淡墨色がよい。

墨つきは語句の初めにするか一番である。これが句讀の代りにもなつて讀む人もよみ易いのである。

1. ベンでインキによつて書くにしても此心得は肝要である。
2. 切字 物の名は二行に跨らない様にせなければならぬ。また候趣由間等が行の頭になるのも見苦しいものである。
3. 用紙は普通に巻紙を用ふ。罫紙は商用若しくは急ぎの場合の外は用ひないのがよい。巻紙は色のないのが本體である。凶禮の時には鼠色を用ふることある。黒線を引くは我國の古禮にはなす。

第二 巻紙の罫め方

禮紙

1. 巻紙の口と奥とは程よく餘白を置くことが大切である。この餘白を禮紙といふ。禮紙は口の方約三寸奥の方に約二寸が通例としてゐる。
2. 天地 巻紙の上下にも餘白を置くことが例である。其の明は人によつて違ひまた時代によつて異なつてゐる。徳川時代には上を多く明け下をつめるのが禮としてゐた。今日では其の反對に下を多く開けて上をつめる人もある。何れが正しいか一定の法式がない、大抵二三分から四五分の處で自分のすきなだけあけそして上下を描へて書く様にすることがよい。

3. 行間 行の間も程よく開けなければならぬ。大抵は字の幅の半分位開けるがよい。また文の終りと自分の署名と先方の名との間は二三行開ければよい。
4. 年月日 年月日は文面よりも一字下げて少し小さく書く。後に残る様なものは年月日を書くが普通は月日のみでよい。

5. 署名 自分の名は月日の下に書いて行の終りをそろへる様にして書く。
6. 宛名 宛名は字畫に注意して丁寧に書かねばならぬ、あまり崩し過ぎない様に書く。其の位置は父兄師長は本文と同じ高さで同輩は一字下り、目下は二字下りといふことになつてゐる。宛名は氏名を書けば間違ひはない。氏だけ書くのは敬意を表することになる。名だけ書くのは近親同等以下の者に限つて、同等以上の近親には「御父上様」「御姉上様」など唯敬稱のみ用ひる。
7. 脇付 侍史、執事、机下、梧下、硯北、座下、虎皮下、御許に、下輩に對しては脇付を省いたがよく、又死去報知の場合にも省くがよい。

8. 封筒明瞭に書くことが大切。住所は詳しく書き氏名は住所よりもやゝ大きく書くがよい。

第三 ハガキの罫め方

- 1、ハガキ大きさに限りあるから簡單明瞭に書いて欲しい。
- 2、ハガキの認め方上手といふのは、文字にあまり大小の差なく裏面一杯に書き埋めたものである。下書なしに書く時は此の點大に注意が必要である。
- 3、ハガキ上下のあけ方は凡そ二分位をよいとしてゐる。但し書く文字の大小によつても異なることは止むを得ない。
- 4、ハガキは縦に書くのが體裁がよい。
- 5、年月日は裏面又は文面の終りの行に本文の字よりも小さく一字さげて書くがよい、表面に月日を書くは面白くない。
- 6、ハガキの表面には我と先方の住所姓名を書き先方の姓名がハガキの中央に納まる様に書くがよい。そして自己の住所姓名は表面切手の下に認めなければならぬ。
- 7、繪葉書は實用といふよりは趣味的であるから文章の配置も繪を見て配合よい様認めねばならぬ。
- 8、繪葉書に認むべき文章は多少文學的に書きそして尙一層簡潔でなければならぬ。

第四 名刺書簡の認め方

近頃はまた名刺の裏面に用事を書くことがやつて來た、これ等は至極便利なことである。これに就て

- 1 文章は簡潔にせねばならぬ。
- 2 字配りは偏しないやうにせねばならぬ。
- 3 先の宛名と月日を忘れてはならない。先方の宛名は己の名の左上、または右上に書くがよい。
- 4 名刺書簡は口上書の様に略式であるから貴き人には用ひないがよい。人を紹介する時等には多く使用される。

第五 便箋書簡の認め方

便箋は銀行會社等の事務用の書簡に多く使用される。やはり簡潔明瞭を主とせねばならぬ。便箋書簡に缺くべからざるものは宛名と我名と年月日と番號とである。

- 1 籠の中に文字が納まる様に書く。
- 2 天地の開きは何れも二三分がよい。
- 3 第一行から書き始めて残の行數の多少は少しも差支ない。
- 4 其の他切字、脇付等は半切書簡と異なることはない。

以上應用練習の二三種を擧げたが、なほ此外商業上の諸書式、書類、履歴書或は公用文等種々ある。よろしく高等科の商業と聯絡をとるなりして随時練習せしめたいと思ふのである。

第九章 書方教授と反省

これは何れの學科にしても大切なことである。つまり教授の結果として或る成績を得たりとすれば我々は其の成績に對して大に反省勘考する處がなくはならない。

つまり全般の成績は如何であるか、劣等者はないか、またありとすれば其の原因はどこにあるかまた之れを救済すべき方法はないか、また個人としての成績の進歩の程度は如何であつたかまた特種の癖あるものはなきや等皆反省によつて得らるゝ處のたまものである。

そこで余は書方教授に於ての反省の一資料として例年各生徒に書の教授について感想を書かせる事にしてゐる。書かせるに就ては皆無記名として書方教授に就てのあらゆる事項についての特種の經驗、方法の研究自己の缺陷及矯正した經驗用具に就ての研究等である。尤もこれは小學校生徒にとつては困難のことである。次に東京府立第八中學校生徒の記せしもの數種を擧げて一例として掲

○ペン習字は好きだ

一、ペン習字の時間は好きである、その好きな原因は僕にもわからない、只何となく好きだ。

一、入學當時はペン習字の時間はあくびばかり出で面白くもなかつたがだん／＼上手になるにつれて好きになつた
一、「今度は何」「習字だよ」と言はれる自然に足が早くなる。そして自分の机にこしかけると「ほつと」安心して先生の來るのを待つ。

一、僕がペン習字を始めたのは此學校へ入つた四月であつた。始めのうちは、なれなかつたので面白くなかつたが乙が甲になり、甲が甲美となるに及んでだん／＼とペン習字の面白味が加はつて來た。

一、幾時間もの勉強をして頭のつかれきつて居る時もペン習字をやると心は落付いて頭のつかれもなほる様な氣がする。

一、僕は小學校の時は字が下手できらひで従つて二度又は三度に一度位しか出さなかつたが八中のペン習字になつてから好きになり其の時から御點を見るのを楽しみになつた。

一、僕は此頃ペン習字が好きになつて火曜日の來るのが待ちどほしくなつた。

○ペン習字の時間は静かだ

一、ペン習字の時間は静かで精神の修養にもなる事と思ふ各教室でもペン習字の時間程静かであるならしつかりと

覺えるであらう。

- 一、ペン習字の時間は一同書き始めると紙上を走るペンの音が聞える程静かで非常に書きよい。
- 一、ペン習字の時間は外の時間と違つて皆は眠つてゐる様に静かで只ペンの走る音だけが聞える。
- 一、ペン習字の時間は静かでよいが鼻をすく／＼させるがづらい。
- 一、一時間目の習字の時間は静かで気が落着くよい時間で此の日は一日中氣持よく面白く勉強が出来る。
- 一、時間中は森として居るから生徒が一人先生に物を突然聞く時などははつとする。
- 一、ペン習字の時間は他の時間に味はふことの出来ない程静かで頭の中がすみきつて来る。
- 一、習字の時間は気が落ちついてしまふが隣の室で大きな聲がいつもすることである。
- 一、ペン習字によつて精神を集中する練習も出来る。
- 一、ペン習字を書く時一字でも拙く書くと大變な事をあやまつた様な氣がして心が非常に焦り立ちます。其時尙ペンを進めると一層悪くなつて習字を書く當の目的たる心の落着きは全く失はれます。其時はペンを置いて静かに深呼吸をやると段々元の様に落着く。
- 一、静かな時間に有益な格言等を書くのでまるで森の中の想ひを思はせる。

○雜 感

- 一、習字をしてゐると何も忘れて氣分がよくなり生存競争が消え去つた様になる。

- 一、上の補助欄をひくのを一先にひいてしまふと後になつてあきて来る様な氣になる。
- 一、次に時間に試験でもあると始めは落着かないが習字をしてゐる中に何も忘れて書き終つてしまふ。
- 一、始めは練習に力を入れ過ぎたが此頃は大分力も加流出る様になつた。
- 一、全部練習と清書も終つて後で上欄の自由畫を書く時が一番嬉しい。
- 一、私は始めに甲だつたのでどうして「甲美」を取れるだらうと思つて今度は少し太く書いた。處が「甲美」だつた。そこで太く書けば甲美がとれると思つた。しかし今は細く書いてもやはり甲美がとれる。そこで「甲美」は字の太い細いに區別なく上手に出来れば甲美がとれると思つた。
- 一、入學當時は書きにくくて手が震へて困つた。又時間がなくて家へ持つて行つた事も度々あつた。此頃は之れと反對に非常にすらすらと書けるのでいつ頃から手が震へなくなつたのかと思ふ。
- 一、僕等は幸福である。木曜日はいつもペン習字があるが朝のまだ氣持のよい時であるから字が、遊んだりつかれたりした後よりよく書け字にしまりが出てくる。
- 一、書いてゐる最中に點のついた清書を持つて来る。見まいとしても心配でちらつと見る、もしそれが「甲美」等であれば嬉しくなつて又一生懸命にやるが若し「甲」か「乙」等であつたとしたら又かと思つて今度はしつかりやらうなどといふ考はもう起つて來ず再びまづい字を書いてしまふ。
- 一、自分等の教室に上手なのが何枚か張出される。僕もそこに張出されたい爲に一心に習ふ一人だ。

- 一、或人はうまくて或人は下手なのに同點をとつてゐる僕は不公平に思ふ……著者曰く、採點には學級本位と個人本位とあることは個人本位の場合にこれが有りがちである。
- 一、ペン習字の時間は静かな事はないが級の者一同がペン習字の時間にはあまりうつむいてやるので非常に衛生上有害である。

一、習字が終つて一人一人黒板に出て書くのが楽しい。

著者曰く本校では書方時間の終に五六分の間黒板に出て競書させるが常である。方法としては各列の前からでも後からでも順次一人宛出て教師の指定した文字を書かせそれに採點して各列の合計點を出し其の多いものを勝とする。

一、僕は小學六年生頃字といふものは形さへよければ甲上をくれるだらうと思つて形ばかりつくるつていたが今になつて「字」といふものゝ眞意を理解することが出来た。

一、此の間友達から葉書が来たので返事を出した。その返事を後になつて友達の所に行つて見た。外に五六枚ばかり外の友達も出ていたが中で僕が一番上だつた様である。

一、自分でも一心になつて書いてゐる時はどうしてもその習慣があらはれて来るらしい。それをわきの者が兎や角言ふと自分でもきまりが悪くなつてしまつて今度はそれをしないで書かうとするどどうしても一心にはなれず妙な字が出来てしまふ。

一、僕は一學期の第一頁の甲美と現今の甲美との比較を見て大に感じた始めの甲美をとつた時には人のものと比較して自分ながらうまいなあと思つたが今の甲美と較べるととても比較にはならない。

○ペン習字に就ての感想

一 生徒

一 四月の時の感想 僕は入學始めにはペン習字などいやものがあると思つた。なにしろ一時間中ペンで習字をするのであるから始めは上のらんの線がまがつて思ふ様にかけず紙をやぶきたいやうな事が度々あつた。ペンなどは数知れず折つてすてた。

又二三行書くと退屈して頭がくしゃくしゃした。であるから教室へ入るとうんざりしたものだ。習字々々僕は習字が一番きらひであつた。

二 中頃の感想 で、すこしたつと人を見ると上手に見えて組中で一番へたの様に思へた。又たび／＼インキをこぼして時間をつひやしたこともあつた。その時はなさけなくなつた、書く時よりも一番うれしいのは返してもらふ時だつた。又表など造つて見た。

三 今の感想 今では教室に入つてもうんざりしなくなつて書く度に自分の字が上手になるのだと思ふと愉快な心持になつた。又字などもすらすらと書ける様になつた、インキもこぼさなくなつた。

又返してもらふ時の心持が一層愉快になつて来た。表の線もだん／＼美がよえて来て乙をとるのもまれになつた小生はペン習字を大へんに好く。

○ペン習字に就ての感想

一生徒

僕は今年の春此の府立第八中學校に入學した時その嬉しさは例へばなかつた。しかしたゞ一つの不安が胸の中に密んでゐた。それは習字!!! 習字であつた學科の方はどうやらかうやらで入學したが試験になかつた習字の事が氣になつた。僕は小學校の時は習字が大嫌ひであつた。習字と云へば級中ではほとんど後の方であつた。あゝ八中には僕みたいな習字のまづい人は居ないだらうにな。入學式の時であつた。毛筆習字のなくてペン習字だと聞いた時は僕はどうにか嬉しかつたらう。それからつき／＼と僕の頭に浮んだ。これからの人はペン書きが必要である不便な毛筆書はだん／＼減んで行く事を知つた。我等の學校が我々の爲にペン習字をさせるのは後に世に立つた時に必要であるからである。それから僕はペン習字の時間は一心不乱でせねばならぬ事を知つた。四月の始めペンをきつて第一頁を机において書かうとした時は始めてとあてがつた手がふるへてなかく書けなかつたが八ヶ月過ぎたる今は平氣で、四月の事を思ひ出すとおかしくなる。

次に師範三年生で正に四年生に進級しやうとする三月末の習字についての感想をあげて見ると次の通である。

○

青師三ノ一 波多野英一

精神統一などと云ふ六つかしい境地に到るまで熱心にやつたわけでもなく唯理窟抜きに習字の時間だけは少くとも面白くやつた心算である。無理にこじつける習字科の効能なら今更聞くにも及ぶまいが如何に世の中で進

歩して總てが科學萬能にならうとも素養が無くては實に一生の苦しみとなる物は習字である。亂筆で端書なり封書なりを貰つても内容が如何に自分を喜ばすものであらうとも嫌惡の情と其人の自己に對する誠意をさへ疑ひ度くなる。此處らは感情の問題で理で云々されては致方も無いが——。字のうまいのはゆかしいものだよく聞く。先生と云ふ仕事に著かねばならぬ我々だ是非にとも言ひたい。

希望 別に改つた希望も無い。唯一週一時間で三年迄じやと嘆息させられる。餘計な事だが習字教室の不潔さも患はしい一つの事柄だ。机の中へは紙屑を入れずに教場の隅に置き掃除の際取つたらどうかと思ふ。

墨精 不情者だから筆を取らうと減多に思はぬかも知れぬことを懼れてゐる。ペンでよいから草書を習はうとは思つてゐる。よまされて讀めないのも困る。楷書でガツチリ寄せられる上りも奥ゆかしくてよいものだ。世の中で複雑になればなる程趣味は人の憧憬の目標となるものだ。

習字科

青師第三學年一組(八) 門田正秀

一 習字科に對する感想 私は小學校時代より習字が好きで現在でもなほ好きです。「好き」といふのは興味が伴ふからでせうが私が過去に於て興味をうゑつけられたのは小學校の三年でした。

清書の時「うまい」といつてほめてくれてすぐに掲示板に張り出された時その時から好きになつたのです。學校は芝白金小學校で今も傍を通る時思ひ出します。

然しこの師範へ入つてからは好きには好きでしたが課外に出て練習する氣にはなれませんでした、然し三年の三

學期になつて友達の練習してゐるのを見てやればよかつたと後悔してゐますがまだ遅くもない事、「好きだ」といふ心の消え失せないうちに出来るだけ熱心にやらうと思つて居ます。

二 習字に對する希望 習字が大切な事は云ふまでもありませんがペンで書くといふことも又必要だらうと思ひます。今から希望を申して實現したとしてもこれからの後の人の事で分りませんが私はかう考へて居ます。習字時間を一週に二時間として一時間は毛筆、一時間はペン筆としたら如何と思ひます。又時には黑板へ出て書かせるのも必要であらうと思ひます。私などは黑板へ書く字はまるで下手で他日教壇に立つた時に困ると思ひます。

三 今後の自分の書體 もう三年で習字はおしまひで嫌ひな人はそのまゝやめるであらうし又好きな人は熱心に続けるでせう。

私は過ぎ去りし三年間を大して熱もいれずに過して來ました。何となくやりたくないといふ怠惰心が現はれて來たのでせう。熱心が足りなかつたと自ら知りました。

此の前四十何枚か書けといけ命令があつた時も初のうちは一枚二枚と書いてゐるうちいつかは知らず止んで居ました。そして出せといふ時にあわてゝ書いたので書きあげたものはなつてゐませんでした。それから習字は一時的のものでないと知り今後は大いにやり餘暇を見て書道を研究しやうと思ひます。

青師第三學年ノ一組 平川 潔

一 僕ハ習字ハ授業トシテハ本校入學以來三年、ソノ上ニ小學校デ八年都合十一年近ク學ンダノデアル、今年ソ

ノ過去十何年ノ長イ間ノ友デアツタ習字科ト分カレルノハ實ニ惜シク悲シイ想ガスル。尋常一年當時ノ腕前ニ比ベルト現在ノ吾々ノ長足ノ進歩ハ驚クベキデアル。コレ實ニ小學校教師ノ基礎的薰陶ニ外ナラナイノデアル。今自分等ガ生徒トシテノ習字ノ授業ヲハナレテ教師トシテ習字ヲ教ヘル立場ニアタツテ、果シテ其ノ先生トシテノ習字教育ヲ完全ニスルコトノ出來ルヤ否ヤヲ考ヘテ實ニ緊張スルモノデアル。

而今後モ更、習字ヲ練習シテ——否私ハ練習スル積リデアル——スルナラバ其ノ任ニハ堪ヘウルト確信スルノデアル。

僕ガ小學校(高等科)在學中ニ教師ノ授業ニ對シテ最モ著シク目ニツイタノハ、板書ノ巧拙デアツタ。實際教師ノ板書ノ拙ナルハ醜イモノデアルノヲ痛切ニ感ジタ。少ナクトモ、教師タル時ハ板書ダケデモ上手ニナツテ見タイモノダト其時感ジタ。

其レデ本校入學以來、習字ニハ、最モ熱心ニ勉強シタツモリデアル。

又、教師トナツテモ、假令數學ノ公式ガ一ツ餘計ニ知ツテ居ラフト國語ノ文字ヲ餘計知ツテ居ラフトソレハ内面的ノコトデサウ目立タヌ。板書ノ上手ハ多少博學ノモノヨリモ他人ニ目立ツテ見エル、又兒童ニモナツキ易イ。

コノ様ニ現今ハ字ノ上手ナルコトハ時代ノ要求ナルヲ感ズル。

青師第三學年一組 馬場 信虎

一 習字科ニ對スル感想 僕は幼いときより習字には興味を持つてゐました。僕の父も小學校の先生になるとき習

字には大変な努力苦心を致しました。

父が毎日毎晩習字をするのを見ていたので習字といふものは幼いときより面白いものであることを知つてゐました。又世の中でだん／＼と忙しく複雑な生活状態に入るに随つて字の上手下手は影響が大きくなると思つてゐます。

二 習字科二劃スル希望 僕は感想にも書いた通り習字は大切なことであり又必要なことであると思ひますから今僕の希望することは小學校のときより習字の時間数を増すことにすることゝ又上の學校に於ても同じく相當の時間をかけて練習致したいと思ひます。今僕はこの師範學校に於ては課目の多いことは知つてゐますが何んとかして五年まで習字の時間があつていただきたいものです。そうすれば三年まで習字をしたときより五年まで習字を勉強致したならば上手にもなれるし又世の中に出てよりもすべてに於て便利なことがあると思ひます。

三 今後ノ自分ノ目標 僕は一生習字は致すつもりです。自分の世の中に生活してゐる以上はどうしても必要なことであるし又自分の父に對して父を喜ばせることになると思ひます。

又自分の興味あることよりも推して見ても當然習字を致して生活して行きたいと思ひます。

青師第三學年一組 勝野太郎左衛門

一 習字科二劃スル感想 先づ第一に御世辯のない所習字は好きである然し之は書いてゐる時の状態であるその前に墨を磨つたり半紙等を用意するのは残念ながら少々面倒臭いのである然し筆に墨水を充分に示して手本をにらんだ瞬間少々前とは気分が違つて來る非常に氣持が良くなるのか難念が何も浮んで來ない、一字かくと二字書きたく

なり一枚書くと二枚書きたくなるそのうちにうねねれが強くなるのか、よりよくよりよくと努力する。

この現れの一つが清書がその時間内に満足に出來ぬ始末となるのである。

二 習字科二劃スル希望 現今社會において習字が必要なることは云ふまでもない。毛筆もであるがペン習字はより必要なのである。例へば何を書いたにしても巧い人の字を見ると實に氣持が良いものである。

よつて他の學校に於いても今少し此の科を重要視する必要があると思ふ。

三 今後の自分の目標 一にも書いておいた通り好きなのであるから趣味の一つとしてどこまでも習ふ心掛けである。

今後社會はすべての競争がはげしくなり益々常に餘裕の少ない生活すると思ふ。

かゝるとき習字等を行つて精神の慰安とするも又一興であると思ふ。少しく誇大氣味があると思ひますが之で終りとします。

感想

青師第三學年一組 廣田 實

一 思ひ起して見れば今年で既に筆を持つてから十年餘もなつてゐる。それ程習字科と私達の生活の間には密接な關係があると私は常々からそう信じて居るのであります。

それ故に勿論あきて一時休止した事もあります。よく／＼習字といふ物（私の言ふは毛筆の事）を曲りなりにも觀察致しますときに言ひ表はされぬ喜びを感じるのであります。

この極致は善であります。筆をもつたときに筆先にまで精神が通じまして全く筆を持つてゐるといふ様な觀念もなくなり唯異身同體一如の形にあるのであります。ひるがへつて考へるときに一體外國のどの國にこんな高尚な特異性をもつた藝術があらませうか、私の狭い頭ではお隣の支那を除いて外に見出し得ないのであります。全々我國のもつ一大誇であるとは私は覺え確信するものであります。

二 右に述べた様に最も偉大な藝術であるところの習字最も我國民を明に象徴してゐる習字これの發展をはかるは取りもなほさず我國民精神を建國の精神に立ち返らせる所以であります。

單なる實用といふ方面から觀察するならば私は敢てこれを重要視する事が出来なくなります。

しかしこの習字の使命は勿論實用的にも考へられないのではありませんが、習字が本當にその動かそれとしても動かし得ない力を持つ所以はその精神的感化の力だと思ひます。

この意味に於て修身科と同一に取扱つて敢てかまはない様に思はれます習字を廢する論等持つものは本當に未だ日本の習字を理解してゐないものであります。

細字練習もいゝと思ひますが時には手に餘る様な大筆を持つて見るも亦宜しからんと思ひます。

三 今後については敢て斷言する事ははゞかりませんが唯々自身の友として毛筆に當りたいと思ひます。將來習ふか習はぬかは問題でありません。又敢て考究する理由を見出し得ないのであります。

「自分の友」「心の友」「無言の話し相手」たる手が私の理想です。書けば限りないがこの邊で擱筆します。

第十章 一郡の書方教育振興策

一郡の書方教育振興策としてはこれまで一學校の書方振興と同様に或る幾人幾校かが中心となり誠心誠意その道の爲に盡し他の學校の先驅者となり研究し指導し行かねば進歩を見る事が六かしものである。一校でもなかゞ困難のところましてや少い處で七八校から多くて百校もある大勢を纏めて行かなくてはならぬのであるから骨の折れることである。この一郡の研究會の發達とかその會の會務の進行等をより圓滑に進ませるには何してもまた其郡の擔當の府縣視學の方が中心となつて世話していただくが一層研究に實が入り進歩發展もはやいやうである。

私のせまい眼界に於ては尤もうまく組織たててそして會の事業としても所謂有名無實に終ることなしに立派に成績をあげつゝあるのは先づ東京府では荏原郡教育會書方研究部であらうと思ふ。今この會の組織及び會の昨年度に於ての活動状態について述べると次の通りである。

荏原郡教育會書方研究部組織事業及方法

一、組織

研究部長

府 視 學 廣 海 良 三

第四篇 書方教育上の諸問題

研究部主任
副主任

各町村二委員 一名 (十九ヶ町村)。

學校委員 各學校研究主任 (約七十三校)。

部員 各學校研究部員

顧問

二、研究部間の聯絡

讀方 讀方 圖書 手工

三、豫算

書方研究部 五〇圓

四、本部書方研究部の目的

書方科ニ就テノ一般研究ヲナシ其ノ成績向上ヲ圖ルコト

1、教師ノ實力養成ヲ計ルコト

書方(毛筆硬筆)ニ對シ教師トシテノ定見ヲ養フコト

本部トシテ特ニ統一アル方針ヲ確立シ其ノ向上ヲ計ルニト

三九四

第四日野尋常小學校長

立會尋常高等小學校長

延山尋常高等小學校長

久原尋常小學校長

第四花原小學校長

倉

河

宮

矢

齊

三九四

持

原

野

利

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

東京府青山師範學校教授
府立第八中學校教授

齊

藤

梅

雄

五、事業ノ大要

一、書方ニ關スル一般研究

二、講習會開催

三、教授研究會

四、教授編目ノ研究

五、研究發表表

六、書方ニ關スル展覽會ノ出品及參觀

七、展覽會ノ開催

八、練習會

九、用具及設備ノ研究

一〇、其他

2、書方ニ關係アル常識(教師)養成ヲ計ルコト

3、其他ノ研究

書方用具 印刷 謄寫 板書 文字ノ縱書橫書其他ノ研究ヲナスコト

大體組織及事業の大要は次の通りである。これ等のすべての仕事の運行は皆先にあげた研究部主任と副主任とが協議の結果進行をはるのである。されば研究部主任の努力は實に大變なものである。今左に參考までに先年度即ち昭和四年度中の活動狀況を記せば次の通りである。

第四篇 書方教育上の諸問題

昭和四年六月十七日、書方研究主任副主任會。開催。

書方研究部組織事業及方法協議

昭和四年七月一日

書方學校主任會開催。研究部長ヨリ研究ノ方針ニツキ指示アリ

右終了後青山師範教諭齋藤梅雄氏ノ小學校書方ニ關シ演講アリタリ

書方研究部町村委員依頼

町村委員會開催。委員ノ任務及事業ニツキ具體的協議ヲ行フ

同 七月十日

同 七月十二日

同 九月十六日

同 十七日

同 十八日

同 十二月五日

同 十二月十二日

同 五年一月廿一日

同 五年二月一日

同 二月三日

同 二月四日

同 二月十二日

尋常一年書方手本ニ就テノ講演會開催。出席者百廿名
講師 顧問 青山師範教諭 齋藤梅雄氏

第三學期開催ノ書方成績展覽會ニ就テ特別委員會開催

書方研究主任及副主任協議會

書初展覽會審査見依頼狀差出

書初展覽會案内狀其他協議

書初展覽會ニ委員調尋手傳依頼狀差出

書初展覽會ニ町村委員手傳依頼狀差出

書方展覽會案内狀差出

各小學校長宛

保護者宛

書方展覽會ヲ左記ノ通り開催ス

西部 二月十、十一日午前九時—午後四時迄

中部 二月十五、十六日午前四時野尋常小學校

東部 二月廿一、廿二日午前九時立會尋常高等小學校

書方研究部役員會開催 各校長主任 町村委員會副主任

同 二月十八日 尙昭和五年二月廿一日教育會長西郷侯爵、研究部長、列席ノ上成績優秀ナリシモノニ對シ褒狀授與式ヲ行ヒ終ツテ審査員ヨリ講評ヲキク。

同 三月十二日 本年度書方研究部員提出ノ研究物ニ就テ審査會ヲ行フ

研究物出品點數十六

最後に書方成績展覽會開催について各關係者に差出した出品依頼狀や通知文は左の様である。

昭和五年一月十五日

荏原郡教育會研究部長 横 溝 良 三

各小學校長殿

書方展覽會開催ニ關スル件

左記要項ニ依リ書方研究部ニ於テ成績品展覽會開催致候條御出品相成度御依頼申上候也

記

一、期日及会場

東部	二月	二十二日(金)
中部	二月	十六日(土)
西部	二月	十一日(火)

立會高等小學校

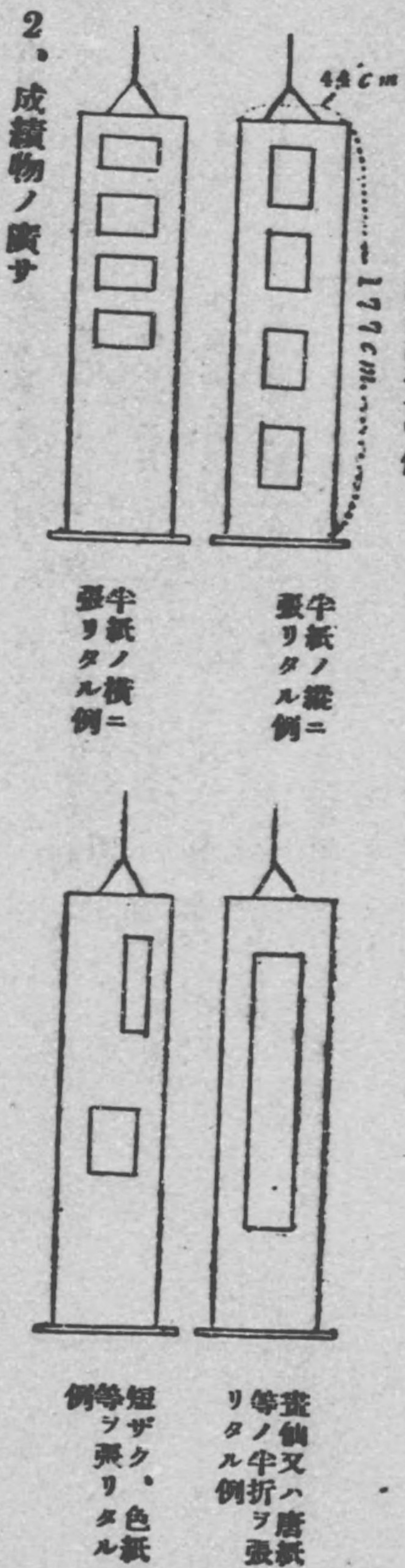
第四日野尋常小學校

第四荏原尋常小學校

二、出品成績物ニ關スル事項

1、出品成績物ハ展覧ノ便宜上(左記圖面ノ如ク)假軸ニ裝付尋常小學校ハ假軸六本(各學年一本ノ割)尋常高等小學校ハ尋常科六本高等科二本トス

假軸ノ大キサ成績品張方ノ例



2、成績物ノ廣サ

右圖假軸内ニ裝リ得ル程度ノモノトス

但シ半紙ノ成績物ノ場合ハ一本ノ軸ニ縦ニ裝ル場合ハ四枚、横ノ場合ハ五枚トセラレタキコト

3、字句書體等ハ各校ノ隨意トス

尙、毛筆書方ノ外ペン、鉛筆習字ノモノヲ出品セラル、モ差支ナキコト

各成績物ニハ學年氏名ヲ明記セラレタキコト

4、衰 狀

出品成績ニ對シテハ審査ノ上、優良者ニ對シ尋常小學校ハ三名、尋常高等小學校ハ四名ノ賞狀ヲ授與スルコト

審査員ハ書方研究部顧問及研究部長其任ニ當ルコト

5、成績品搬入ノ期日及返戻ノ方法

成績品ハ各校ニ於テ其ノ部ノ會期ノ三日前迄ニ會場學校ニ搬入シ閉會後ハ五日以内ニ受取ラレタシ成績品軸物ヲ卷キ終リタル表面ヘ學校名ヲ明記セラレタキコト

例

□ 何々小學校 □

三、職員作品出品ニ對スル御願

1、職員ノ出品物ハ小畫像全紙程度ノモノ三枚以内トシ成可軸又ハ領仕立若シクハ雲版入等トシテ出品スルコト

2、職員ノ作品ハ参考品トシテ各都會場ニ展覽致シタキニヨリ振ツテ御出品相成ダシ

第十章 一郡の書方教育振興策

第四篇 書方教育上の諸問題

四〇〇

- 3、職員ノ出品物ハ部ノ何レヲ問ハズ二月八日迄ニ、世田谷町第四在原尋常小學校校長宛ニ御届相成タシ
- 4、出品物ニハ學校名及氏名ヲ明記セラレタシ

〔附〕 兒童成績ニ要スル假輪ハ各校ニテ御用意相成タシ

尙右輪ハ研究部ニテ職メテ作製サセル場合ハ一本金十二三錢位カト思ハル、爲御希望ノ學校ノ分ハ取マドメテ注文シ會期前ニ各校ヘ御届ケ致スベク候
 甚ダ勝手ナガラ御不用ノ所ハ本月廿五日迄ニ
 大崎町第四日野尋常小學校内倉持邊ニ送其旨御申出下サレ度候

第四日野尋常小學校(中部)

三、二月廿一(金)廿二日(土) 同前

立會 尋常小學校(東部)

追而御來臨ノ際ハ御名刺受付ヘ御示シ下サレ度願上候

拜啓 倉々御清穂幸實候

陳者左記日程ニヨリ本郷各小學校兒童書方成績展覽會開催
 候間御貴臨ノ榮ヲ賜度御案内申上候

昭和五年二月三日

在原郡教育會長候爵 西郷從三

殿

一、二月十日(火)午前九時ヨリ午後四時迄

第四在原尋常小學校(西郷)

二、二月十五(土)十六日(日) 同前

昭和五年二月四日

在原郡教育會研究部長 横溝良三

殿

兼テヨリ御盡力願候書方研究部展覽會ハ先般各校ヘ御通知申上候候日取ニヨリ開催ノ事ト相成候ニ付何カト御盡力下サレ度御依頼申上候
 尙特ニ貴部ノ開期ノ前日ニハ放課ニテモヨロシク候ニ付會場學校ニ御出ノ上同校々長ト御協議ノ上何カト御世話下サレ度願上候

昭和五年二月四日

在原郡教育會研究部長 横溝良三

小學校長殿

貴方研究展覽會開催ニツイテハ貴校 調導ニハ兼テヨリ特別ナル御盡力ヲ御願致シ有難ク厚ク御禮申上候尙先般御通知申上候候通リノ日取ヲ以テ展覽會開催致スコト、相成候ニ付御多忙中恐入候ハ共右展覽會開催ニ關シ一層ノ御盡力下サル上ニ何カト御便宜御與ヘ下サレ度特ニ御願申上候

昭和五年二月四日

在原郡教育會研究部長 横溝良三

書方研究部各町村委員殿

貴方研究部本年度行事豫定ノ展覽會ハ先般學校ニ御通知申上候候日取ニヨリ開催致スコトト相成候ニ付、貴大内各校主任トモ御協議ノ上何カト御盡力下サレ度特ニ御依頼申上候

昭和五年二月四日

在原郡教育會研究部長 横溝良三

小學校長殿

書方展覽會ニツイテ貴町書方研究部委員貴校 調導ニ別紙ノ如キ御依頼申上候間可然御便宜御與ヘ下サレ度御願申上候

拜啓嚴察ノ御益々御清榮ニ賀儀
 陳者書方研究部主催ノ兒童成績品展覽會ハ中部ハ當校ニ於
 テ開催セラル、コト、相成候ニ付新道奨励ノ御思召ヲ以テ
 多数御來臨賜リ度特ニ兒童諸君モ御引率御來臨下サレ度此
 段御案内申上候也

尙當日ハ當校ノ一般成績品モ展覽致置候ニ付併セテ御
 覽下サレ度候

昭和五年二月八日

大崎町四日野尋常小學校長 倉持 義三

小學校長殿

肥

二月十五日(土) 午前九時ヨリ午後四時迄

二月十六日(日) 同 前

(審査、十六日)

審査員 東京府青山師範學校教諭 齋藤雄雄先生
 荏原郡教育會研究部々長 横溝良三先生

書方成績品展覽會へ御出品、成績物ハ中部ハ二月十二日
 (水)迄ニ會場大崎町四日野尋常小學校へ御搬入下サルヤ
 ウ相成居候ニ付念ノタメ御願致置候
 尙職員ノ作品モ振ツテ御出品下サルヤウ御依頼申上
 候

昭和五年二月八日

大崎町四日野尋常小學校長 倉持 義三

荏原郡中部各小學校長殿

第十一章 兒童への書話

書方の成績を向上させるには一も練習二も練習といふ様に何でもかんでも練習ばかりを繰り返さねば上手にならぬと思ふはあやまりである。無論練習の貴重なことは勿論であるがなほ時には一時間位時間を費しても書についての話、また古人書道に熱心であつた話、苦心した話、或は物を書くに粗末にしまつた話等何かとはなしに話して聞かせるのである。かくすれば單に兒童は此の話材によつて興味を感じるのみでなくひいては書方といふものは面白いものだといふ様に本科を愛好する様になり結局書方のある日を指折り數へて待つといふ様になるのである。私がこの書話の必要及び効果について痛切に感じたのは夏季兒童習字會の時である。先に日程にも記した様に全員登校して二時間練習して後二十分乃至三十分この書話をまじへたのであるがたしかに面白く且つ本科愛好の念をつよからしめた様である。

話材としては我國にも幾分はあるけれども片々たるものであつて、到底三十分乃至は四十分と續く話はない。こゝに余は感じてその話材を骨としこれに肉をつけ以て左の如く起稿したのである。

大に利用していたらけば幸福である。

一 池を硯とした話

九州の小倉に、下村薫村といふ人が住んでゐました。

此の人は若年の頃から、字をかくことが、大層好きでありました。其處で毎日の課業として、千字宛かくことにいたしました。毎日其れを實行して勉強して居りました。

處が此處に戦争が起りましたといふ譯は、國の殿様と、長州の毛利侯とがある事柄から、遂に戦をする様になつたのであります。

さあ大變です。何にしましても、随分長い間、太平が続いて皆柔弱になつてゐますこと故、其の驚きは非常なものでありました。随つて其の混雜やら騒動やらは、とてもよく筆紙に盡されるものではありません。

小倉の人々は我先にと、争つて肥後の國の方へ逃げ出しました。

薫村も亦大勢の人のする通り、家族一同を引連れて、小倉を後に逃げ出しました。處が薫村は例の習字ずきですから、第一番に筆や硯や墨紙等を携へて出かけたのであります。

而して毎日習はねば氣が濟まぬ、彼の千字宛書くことであります。彼は成程戦争で逃げる忙しい身であります。然し彼は習字といふ方にかけては全く、戦争もなければ、宿望もなかつたのであります。

薫村は宿につくと必ず千字宛は字を定めて習つたのであります。どんなに時刻がとそくならうが、どんなに身體が疲れてゐやうが、彼は決して一日の課業を捨てなかつたのであります。

戦が治つて後、彼は筑城郡田坊寺村に住んでゐました。彼が毎日千字宛、字を習ふことは依然として前の通りであります。わたくしは此處で少しく彼の、字を習ふ奇抜な方法をお話しておきましよう。

彼の手習の方法を見ますと、まづ草紙は白い板を用ゐたのであります。次に墨は只の水を使つたのであります。其の次に筆はと言ひますと、桂の枝などを、打ちつぶしたので代用せしめたのであります。

かういふ道具立てで、日々千字の字を、かいては消し、書いてはけして、遂に晩年にいたる迄、毎日々々、五合の水と千字の字とを磨したことはなかつたのであります。

薫村の家の近くに二つの池がありました。一つは大きく、一つは小さくありました。彼は此の二

つの池に夫々名をつけました。大硯、小硯と呼んで居りました。而して

「自分は死ぬまで、此の二つの池の水を汲んで字をかく心算である。自分は此の池の水があるかぎり手習をする覺悟である。」

と、常に懇意にしてゐる人々に、物語つたといふことであります。

其の道に精進する彼の意氣といふものは、實に素晴らしいではありませんか。

かういふ様に熱心に習字を勉強しましたから、遂に近世の名家と謳はれる様になつたのも、誠に故ありと謂はねばならないのであります。

童村は又決して自己の名を世間に知られやうとはいたしませんでした。故に手本などは猥りに書くことはいたしませんでした。

又手紙などでも、是非か、ねばならぬ時には、書くことは書きますが、後から直ぐに、

「此の間あげた手紙をどうかお返し願ひたい。」

と、催促して取り上げてしまつたさうです。斯様な點にも、餘程常人とは變つた性格を持つた人であります。

彼の住家の前に一峯が聳えて居ります。彼は其の山にも見我峯といふ名を與へました。彼の遺屍

は其の山の中に葬つて在るさうであります。

二 柿の葉で手習

支那が唐と號した頃、ある土地に慈恩寺といふ御寺がありました。此の寺に居つた僧侶の中に、

一人のそれは、貧乏な坊様がありました。

此の坊様は字を書くことが、大變好きでありました。けれども何をいふにも至つて貧乏ですから、紙も買ふことが出来ないのであります。

「あ、何とかして字を習ひたい。然し自分には筆は愚か紙さへ自由に買へないのだ。」

と、溜息をついて悲しさに言ふのであります。

かういふ様に言つては見ても、書きたいといふ心掛は、少しもなくなるのではありません。否なくなる處か、書けないと思ふと、尙書きたくなるのが、人情の常であります。

「何とか巧い方法はないかなあ。」と、彼は常に考へてゐました。

時は木の葉の散る秋も半ば過ぎの頃でありました。坊様は獨り心の中に、字を書きたい、然し紙を買ふも金はなし、と言つて書きたいし、と思つたつて巧いものはなし、と云ふ工合に色々のこと

を考へ乍ら、腕をくんで、今しも西の山の端に沈まうとする夕陽を眺めるのでありました。

お寺の庭には澤山の柿の木があります。冷たい一陣の風が颯と吹き起りました。バラ／＼と大きな小判形の柿の葉が、坊様の足下に亂れ散つて参りました。

坊様は素早く此の柿の葉に目をつけました。而して

「あゝさうだ、此れ此れ。」

と、言ひ乍ら四五枚を拾ひ上げました。

彼の顔には言ふに言はれない喜悅の色が浮かんで居ります。年頃日頃求めてゐたものが、今漸く手に這入つたからであります。

坊様は今度は澤山の柿の葉を、拾へる丈拾つて、彼の部屋へ持つて参りました。

柿の葉を此様に拾ひ集めて行つて、一體は彼は何にするのでせうか。

言ふ迄もありません。彼は此の柿の葉で、紙の代用をしたのであります。彼は柿の葉の上に、字を書いたのであります。彼は實に寸陰を惜んで柿の葉に文字を習つたのであります。

縱令それが紙でなく木の葉であつても、自分の全精神を打込んで、書の道に進んだならば必ずや上達されることでありましょう。

此の坊様もその通り、精神一到何事か成らざらんで、しまひには、此の坊様は唐の時代に於ても指折の書道の大家となつたといふことであります。

志ある者は事遂に成る。私共は互に一生懸命やらうではありませんか。

三 雨滴に教へられた顔氏

草書楷書を善くし、筆力が遒勁秀拔である譽を残して、永く後世から仰がれ唐の顔真卿は字を清臣と謂ひ、瑯琊臨沂の人であります少い時から、非常な博學で且辭章に巧でありました。

玄宗皇帝の天寶十四年、有名な安祿山が謀反をいたしました。其の時顔真卿は出で、平原の太守となつて居りました。そこで顔真卿と共に大義を唱へまして安祿山を討ちました。又朝宗の御代に李希烈が又叛きましたので、彼は勅を奉じて往つて李希烈に面會して、之を諭しました。

所が李烈は彼を捕へて、自分の方につけと言ひました。顔真卿はどこ迄も忠義な人でありました故、何と言はれても責められても決して降りません。何處迄も忠孝の大義を説いて、反對に李希烈をやりこめましたので、とう／＼叛臣の爲に殺されてしまひました。本とうに可哀さうなことであります。

顔真卿は死んでから後、文忠と諡されたのであります。

此の人が書て或る時、書堂に在つて習字をしてゐましたが、どうしても點畫が思ふ様にかげません。

「どうしたんだらう。今日に限つて何故かう上手行かないのか。」と彼は考へざるを得なかつたのであります。

「まゝいま／＼しい。一層もう習字なんか止めてしまはうか。」とも思ひつめました。かういふ時は見るもの聞くもの癪にさわるのであります。

「此の筆も折つてしまはう、此の硯も焼いてしまはう。」と遂に決心してしまひました。

丁度此の日は、雨が着々と降つてゐました。顔真卿が、不圖窓を覗くと、其處には軒端を傳ふて雨滴が玉をなしてポツ／＼落ちてゐました。

之に目をとめてゐた真卿は、

「點畫の妙所は此處に在る。」と突然大聲をあげて叫びました。

之が世に謂はれる所の屋漏痕の出所であります。

顔氏が後に偉名を博したのも、かういふ苦しい境を突破して來たからであります。窮すれば通ず、

といふ語も、艱難を玉にす、といふ格言も、顔氏の様な人の、心の苦しみ、道の備みに突き當つて、もう如何にもかうにも行かないといふ點に到つて、挫折しないで進んで行く、さうした場合によく適合するのではないでせうか。

易々と物が上手になれ、軽々と名人の仲間に入ることが出来るなら、修養も刻苦も入らないのであります。

名を竹帛に垂れて芳を千歳に残す、人生の快事であると共に至難の事業と言はねばなりません。

四 燒 火 箸

賤ヶ岳の七本槍で名高い加藤嘉明は、常に火鉢に向ふと、火箸を取つて灰の上に文字を書く癖がありました。之は嘉明が武勇一偏の大將でなく、文事の方にも嗜がなか／＼にあつたといふ證據であります。

所が大名の仲間にも悪戯好の連中があつて、何とかして一つ嘉明の癖に對して、悪戯をしてやらうと、内密に相談をいたしました。

大名甲「どうやつたら善いだらうか。」

大名乙「さうだね、巧い考はないものか。」

大名丙「あるよ〜。」

大名連中「何だ何だ、其の妙計は。」

大名丙「計略は密なるをよしとする、實は………ね。よいかね。」

大名連中「妙計々々、面白いぞ、明日は加藤の泣き面を見てやらうわい。ハハア、ハハア。」
さあ、どんな事が持上がるでせうか。

翌日加藤嘉明は、悪戯大名達の間、其様な計畫があらうとは夢にも知らないで登城いたしました。而してお城の中の大廣間に來て控へて例の通り火鉢によりかゝりました。而して平素の通り、火箸を取つて火鉢の灰の上に文字を書かうといいたしました。

すると之は驚いた、火箸は熱く〜熱されてあつたのでした。其れを突然、握つたのだから堪りません。嘉明の手の皮や肉は、ジイッ、ジイッと變な音を立てながら、異様な臭氣を漂はせ乍ら、焼けたされたのであります。然し沈着にして豪膽な嘉明は、素知らぬ顔して、平氣の平左衛門で、何時もの通り、靜かに文字を書いて居ります。

隣の方に嘉明の様子を、息を殺して窺つてゐた例の悪戯大名達は、嘉明が眉一つ動かさないうで文

字を書いてゐるのを見て、自分達の方が驚いて仕舞ひました。

大名丙「いや驚いた。熱くないのかね。」

大名連中「駄目々々、折角の妙計もあゝいふ豪傑にかゝつては臺無しだね。」

大名丙「降参々々。」

此様な話をしてゐる中に、嘉明は、徐に火箸をおいて立上がりました。而して殿中にずうと伺候してしまひました。

古、禪宗の坊様の言つた言辭に、

滅却心頭火亦涼 といふことがあります。嘉明か焼火箸を掴んで、平然として文字を書いてゐたのも、此の坊様の言つた言辭の意味と一脈相通するものがあると思はれるのであります。

其れにしましても、かういふ様な境に到り得るのも、不斷の修養の結果と考へられるのであります。お互に一生懸命で勉強いたしませう。

五 文晁と華山

我が國の畫家の中でも、谷文晁と云へば誰でも知らない者はありません。其の程文晁は名の高い

畫家であります。

此の文晁は生つつき性質が非常に豪放で、其の上酒を大層好みました。ですから常に四斗樽を自分の部屋に据えて置きまして、畫を描く暇には盃を手から離しません。而して酔えば必ず氣をあげて滔々と論ずるのであります。

或日例の通り文晁が、盃をあげて大いに呑み、大いに論じてみました。其處へ一人のまだ年の若い書生が、肩を怒らして得意になつてやつて來ました。而して自分で提へて來た、畫を文晁に見て批評して呉れと言ひました。然し其の態度の中には

「どうだ文晁、俺の畫には感心したらう、年は若いが腕は確なものだらう。」

と、いふ風が歴々と見えるのでした。本より豪放我慢の文晁の事ですから、心中に

「此奴、青二才のくせに自惚れて。」と思ひましたが、それでも何にも言はないで、例の通りグイグイと盃の數を重ねてみました。

すると如何した機か、文晁が過つて盃を手から取落しました。座には酒がしたゝか流れこぼれました。

文晁は突然、彼の書生の提へて來た所の畫を取つて、其の流れた酒をよき拭ひました。眼の前で

自分の大切な畫が、雑巾の代りになつてしまつたのですから、其の書生は額に青筋を立て、怒り出して、

「どういふ譯で其の様な亂暴な振舞をなさるか、返事によつては如何に文晁であらうとも許すことは出来ない。」

と、言葉鋭く責め詰りました。

すると文晁は冷かにあざ笑つて、

「さればよ、お前のかいて持つて來た其の畫は全く無用の物であるから、私は雑巾の代りに使つたのだ。」

然るにお前は、此の様な無益な畫を持つて來て、人に誇り示さうとしてゐる。だから私はわざとかうやつたのだ。」と、

之から辭々と、更に詳しく畫法を説明して聞かせてやりましたら、其の書生も初めて、文晁の博學であり、又見識が高く、並々でないのに、氣がつかまして、其處で今迄の自分の高慢な態度や、亂暴な言葉づかひなどを深く詫びて、どうか改めて弟子にして下さいと熱心を面に現はして頼みました。

かう下手に出られると、其處は豪放な文晁の事ですから、快く許してやつて、遂に門人の一人としてやつたといふ事であります。

かういふことがあつて五六日経つた、或日の事でありました。前と同じやうに一人の書生畫家が、又文晁の家を訪ねて参りました。而して文晁は是非面會したいと申込みました。文晁は今日も亦例の通り盃を舉げて居りましたが、其の書生畫家の姓名を聞くと、俄に盃の手を止めて、急に酒樽や何かを片付けさせ、座敷を綺麗に掃除させて扱其の書生畫家を請じ入れさせました。

全く文晁が此の書生畫家に對する態度といふものは、單なる書生畫家に對する態度でなく、全く一士人に對する態度を以て接したのであります。

一應初對面の挨拶がすみますと、彼の書生畫家は携へて参りました、山水の畫幅を出して、

「どうか先生の御批評を願ひたい。」と丁寧に願ひますと、何時も豪放な文晁とはこと變り、いとも懇懇に應對いたしました、晝も周到の注意を拂つてよく視、苟も言葉を發しません。其の上弟子達に向つて、

「此處にお見えになつてゐる御仁は、當代に於て才學希に見る所の、渡邊華山先生である。お前は今日御會ひするのは非常に幸福なことであるから、敬んで先生の教を受けたらよからう。」

と、申すのであります。

處が文晁の弟子達は、前日の書生のことがまだ生々と記憶に残つてゐるのですから、

「文晁先生、今日は我々を抱かうとしてゐられる。油断をすると後でとんだ笑を受けるぞ。」と皆用心して一向華山の側へ寄つて來るものもありません。

又華山も謙遜して

「自分は無名の一個の貧書生畫家であるから、到底、文晁先生のお讚めの辭に當るものではない。」

と、ひたすら辭讓するのであります。而して華山は尙數枚の山水を出して、

「どうか文晁先生の御遠慮のない御批評を頂きたい。」

と、言ふのであります。

けれども文晁は辭言を卑くして妄りに批評はいたしませんでした。之で此の日の二人の對面は丁重を極めた裡に終りまして、華山に文晁の許を辭しました。

其の後數日たつて再び華山が、文晁の許を訪ねました。而して

「是非先生の門下にお加へ下さる。」と願ふのでした。此處にいたつて初めて文晁は、華山の晝に

就いて批評をいたしました。

「貴君の畫を視るに、意匠の豊かな點は到底私の及ぶ所でないが、只惜しいことには、岩石や峯巒などを描くに用ふる細き點、即ち世に所謂、米點の法に聊か不十分な所がある様である。一と、之をきいた華山は、僅かな注意ではあるが、其の畫法に於て得る所が甚大であつたと、後々迄も度々物語つたといふことであります。

文見位になると、畫ばかりではない、全く人を觀る力も偉いものと言はねばならないのであります。

六 八十五枚目

宇治黄蘗山第一義の額は、高仙和尚の書と言はれてゐます。此の高仙が此の額を書いた時に面白い話があつたのであります。

此の高仙和尚の弟子に大隨といふ坊さんがありました。此の弟子は餘程普通の坊さんと變つた所がありました。

扱高仙上人は何とかして、額の文字を出来る丈立派に書きたいと、一生懸命で習つてゐます。其

處へ例の奇僧大隨が唯一人來て見てゐます。云ふ迄もなくお經の勉強などは、そつちのけにして一向平氣なものです。

高仙和尚が一枚書きあげると大隨が

「どうも下手ですね、此様なものはとても額にはあげられませんね。」と手酷くこきおろすのでした。和尚が又一枚かくと、

「いや、尙悪いですね、どうしたのでせう、お師匠様は書けば書く程下手になりますね。さあもつと書いた書いた。」とまるで子供でも冷かす様に馬鹿にして言つてゐます。でも和尚様は決して怒りません、ニコ／＼唯笑つてゐるばかりです。而して又書きますと、又惡口です。

「お師匠様、あなたは今迄字を滑稽古なさらなかつたのですね、幾ら何でも少し書いたら此様な文字は書かない筈ですよ、人が見てゐたら何と言ふでせう、幸私しが見てゐないからよい様なもの、まあ此第一字目の出来は何ですか。

よく金釘流だの、蚯蚓ののたつたのと言ひますが、まあさう言はれる方が、まだましですね、之はまるで形なしですよ。……あつ、その第三字目、此れは尙酷い、菟弱に目鼻をつけてぶるつと振つた様な字です、字ぢやあない畫ですよ、その畫もたゞの畫ではないお化の仲間ですね、

……え、何ですつて其様な字をかいて、門前の田伍作の子供でも、もつと氣の利いたしつかりした字を幾らでも書きますよ。

は、あ、駄目々々、好い年をして呆れたものですな、まだ書く氣ですか、最も八十の手習といふこともありまますからねまあ、精々元氣を出して、しつかりお書きなさいよ、あは、いといふ調子に丁度目上の者が目下の者を擲論やうに、それは、酷いことを言つてお師匠が苦心して書く一枚々々に散々な罵評を浴せかけるのでありました。

それでも流石に禪で鍛へ上げた高仙和尚のこと故一向に驚きません。悪口を言はれ、ば言はれたで素直に何枚でも書直してゐました。一方大隨も何處迄もへらず口を叩いて止めません。

さあかうなると、何處迄行つても果しがありません。而して高仙和尚は書きも書いたりとう／＼八十四枚目を書き終りました。

此の時大隨は何と思つたか感じたか、不意に立つて其の場を外しました。其の留守の間に、「やれ／＼煩さい奴が居なくなつて、どうやら氣が伸び／＼する。どれ此の間に一つ。」と、筆を縦横に振つて、放膽に一気に書き上げました。其處へ大隨がひよつくり又戻つて參りました。

大隨は自分の留守に師匠の書いた一枚に目をつけました。高仙和尚は心の中で又悪口かと思つて

ゐますと、暫くの間大隨はまるで、其の一枚に自分の精神を吸ひ取られた様に、夢中になつて見てゐましたが突然大聲をあげて、

「善哉々々々々。」

と、手を拍ち足を踏みならして、躍り狂つて嬉し悦んで、此の八十五枚目の書を賞讃いたしました。

八十五枚目に到つて

「もう十分。」と見當をつけた大隨も偉い坊様です。而して又八十五枚目に

「今度こそ。」と機會を捉へて、立派に書き上げた高仙和尚の倦まない努力と、よく禪機を掴んだ態度とは、どちらも到底風俗の至り得ない境に在る人々と言つてよいかと思ふのであります。

所謂機微をうがつ。個中の消息を解す。といふ様なことは、かういふ種類の人々によつて始めて會得出来ること、思ひます。

因みに此の黄蘗宗は、禪宗の一派でありまして、唐の僧希運禪師を始祖とするのであります。此の希運が、福建省福州府に在る黄蘗山に住んでゐたから此の宗名が生じたのであります。

我が國に之が渡來したのは、後光明天皇の御代で、明の僧隱元が參りまして、山城の宇治に一字

を建て、此の宗を弘めたのが始まりであります。即ち黄蘗山萬福寺といふのが、之であります。

七 貧を介せず歌を樂しむ

香川景樹がまだ青年の頃、京都に住んでゐましたが、此れといふ定つた職業もなく、色々の事をやつて、やつとの事で其の日其の日を過してゐました。

餘り景樹が貧乏の爲に苦しめられるのを、見るに見かねて家主が、若干の金を出して、

「此の金は眞に僅かばかりであります、どうか貴君の日々の暮しに、お使ひ下さい。」と、言ひました。

景樹は家主の親切を心から喜びました。

「それは何ともお禮の申し様もありません。御親切に甘へて拜借いたします。何れお返しする時があるでせうから、どうかそれ迄お貸しを願ひたい。」

と、お禮をかねて申しました。固より返して貰ひたくて、やつたお金ではありません故、家主は、

「決して此の金については心配しないで下さい。」と、言つて自分の家へ戻りました。

景樹は其のお金を懐に入れて、町の方へ出かけて行きましたから、家主も心の中で、「きつと

彼^お金で米でも買つてくるだらう。是で私も安心した。」と、一人で言つて居ました。

暫くすると景樹は町から歸つて参りました。家主は自分の思つた通り、景樹が求めて来たこと、思ひましたが、其れでも念の爲にと、こつそりと景樹の家を覗いて見ました。すると景樹は、米を買つて来たとは相違も相違して、とても腹のたしにはならない所の、最も立派な短冊を何枚か求めて参りまして、心靜かに獨り其の短冊の和歌を書き寫して、楽しんでゐました。

家主は景樹の有様を見て思はず、

「吁偉い、これでこそ本とうの學者だ。」と、叫びました。而して尙、

「あの様に困つてゐるから、定めし私のやつたお金でお米でもといふのが普通の人情である。然るに彼の人は、貧乏などはまるで人ごとの様に考へてゐる。今時彼の人の様に貧苦を忘れて、以て和歌を覺ふといふことは、全く希しいことだ。ほんとうに感心なことだ。年は若いが偉い者だ。あゝいふ人が今に立派な學者となるのであらう。」

と、しみじみと感歎いたしました。而して景樹のことを、自分がよく知つて居る所の、香川黄中に折を見て話しました。すると黄中はさういふ人なら、確に末の見込のある人だから、とにかく一遍會つて見たいといふことでした。

家主が黄中の趣きと、景樹に語りますと、景樹も黄中に會ふことを希望してゐましたから、早速面會して見ました。

黄中は景樹に會つて、種々談して見ますと、聞きしに勝る非凡の才能の持主であります故、非常に景樹の才能を愛しまして、其れから自分の家に留めて、自分の有つてゐる丈の歌學に關することを授けてやりました。景樹も亦一所懸命になつて、黄中に就て歌學を勉強いたしましたから、其の學問は目覺ましい勢で進歩いたしました。

黄中は自分の眼識の達はなかつたことを喜びまして、遂に景樹に頼んで自分の家の後嗣となつて貰ひました。

之が後年名家となつて、一世の歌風を風靡した香川景樹其の人であつたのであります。

景樹が何處迄も其の好む所を楽しんで、少しも貧困の爲に、其の心を煩はされなかつたといふ事は、誠に見上げたもので、苟も士を以て立つ人は此の位の覺悟があつて欲しいと思ふのであります。其れは景樹の様な偉い人で始めて出来る事で、吾々の様な凡人には容易に出来るものではありません。……が然し志ある者は事遂になるといふ事もあります故、力めてかういふ境地に迄行ける様、お互に何の道でもよいですから、修養いたしたいものであります。

又、家主と言へばすぐに強慾者といふ連想が起りますが、景樹の家主は全く親切な而して感心な者であります。

店子が困るのを見て氣の毒に思ひ、お金を恵んでやつたばかりでなく、景樹の將來大成する人であるといふ點を、見抜いたのも、なか／＼偉いではありませんか。

此の家主にして此の店子あり。と言ふことが出来ると思ふのであります。

八 酒屋の壁の文字

支那の昔、師宜官といふ書の名人がりました。此の人は字の中で、最もよく書いたのは、大字であつたさうです。處が其の大字をかく人が、僅か一寸四方の方形の中に、千字文を皆書いて人々をあつと言せた程の、藝當もやつた、まあ一種の天才書家であつたのであります。

其の上に此の人は、性質が極めて、磊落であるばかりでなく、又非常に飄逸な人でありました。ですから勿論お金などを澤山持ちたいなどは夢にも思ひませんでした。随つて貧乏はいふ迄もありません。而してお酒ときたら、文字を書くことに次いでの大好物でありました。

けれどもお酒のみたくても、何時もお金はありません。其處で磊落な彼は、例のお酒が呑みた

くなると、太い太い筆を擔いで、酒屋へやつて行きます。

「今日は、御主人いいで、すか。」

「あ、先生ですか、まあお休み下さい。」

「今日も一つ呑みたいのですがね。」

「いやさうですか、では一つ書いて貰ひませうか。」

「承知しました。すぐ書きませう。」

「そんならお願いいたませう。」

之だけきいてゐると何だか謎の様で、どうして師宜官は酒を呑むのか、酒屋の亭主が何をたのむか、さつぱり分りません。

さうしてゐる内に、酒屋では、偉い大きい硯をかつぎ出して、小僧に

「まつさ、まつさ。」と墨をすり出させました。師宜官はニコニコしながら墨の磨れるのをまつてゐます。

「まあ先生勇氣をつける爲に一杯お上り下さい。」と亭主はコップに山吹色をした酒を溢れるばかり盛つて出しました。

「之は、遠慮なく頂戴いたませう。」

「あ、甘露々々。」ぐつと計り呑み乾しました。かうしてゐる間に、墨が磨れました。小僧が、

「先生墨がすれました。」と言ひました。

「よし、其れでは一番書きませうか。」

一杯の酒に元氣をつけた師宜官は、彼が擔いで來ました太筆をやをら取つて、墨を黒々と含ませました。

而して酒屋の入口の壁の上へ、大きな、次の文字を、素晴らしい勢で書きました。

酒者百藥之長也。

さうすると、どういふ譯だか分りませんが、此の字を見るものが、次から次へと傳へ集つて來て、酒屋の前は祭の様な人出であります。いや來るは、何千人何萬人の人々が見に來るか分らない程でした。

随つて其の爲に酒屋の酒の賣れること賣れること。瞬く間に店にあつた酒を賣りつくし今度は庫から、どしどし運んで而してどしどし賣りました。其れでも尙買手は後からと買ひに參ります。

此の爲、此の酒屋は一擧にして、澤山のお金を儲けました。詰り今迄かういふ風に、師宜官が酒

屋に来て大文字をかくと、不思議にも人が集つて来てお酒が大變に賣れるのです。酒屋の主人は師宜官の爲に今迄度々此の事でお金を儲けてゐるのですから、其の度毎に師宜官には、もう其れはくどつさりお酒を御馳走するのであります。

今日も例の手で人を多く集めて、酒屋にお金を儲けさせたのであります。

ですから主人の喜びは並大抵ではありません。

「先生々々。」とそれはく／＼大切にするのであります。

酒屋で師宜官は、頗りに大盃を舉げて愉快に呑んで呑んで呑み徹して、

「いやどうも、すつかり御馳走になりました。其れでは今日は之で失禮いたします。」と盃を置いて外へ出て、前に書いた壁の文字を綺麗にふき消して、

「肝愉快々々、酒者百薬之長也。」と言ひ乍ら例の太い筆を抱いで、よろ／＼し乍ら自分の寓居を指して歸へるのであります。

師宜官が文字を書けば、人が雲の様に集つて、而して酒がいくらでも賣れて酒屋が儲かる其の上には師宜官がいくらでもお酒を呑むことが出来る、此れ等を考へて見ますと、どれも之も皆、書の餘徳であるといふことが出来るのであります。

何と書といふものは不思議な力があるではありませんか。

九 夜具の穴と弓の書

江戸時代の書家に、菱湖先生と稱へられた人がありました。此の人の書道に熱心であつたことを一寸お話しいたませう。

此の人が未だ名を成さない頃のことでありました。每晚床に這入りますと、此の人はきまつて夜具に、指を以て字形を工夫し乍ら、何度となく書くのであります。而して何時の間にか眠につくのさうです。夜中に目が覺めれば又かきます。其の中又眠ります。又覺めれば又随つてかくといふ有様でした。

ですから一冬の間に、夜具の裏の方に、一尺四方位の大きなく／＼穴があいてしまつたさうです。何事でも名人になるには、夫々難行苦行を積まねばならぬのであります。

俗に謂ふ「果報は寝て待て。」とか。

「棚から牡丹餅。」

とかいふ様なことでは、名人になるは愚か、人並の生活も出来なくなるのであります。之によく似た晝の先生の苦心談を一つかきませう。

景文先生が時の相撲界の大闘である、或る力士を大變に可愛がつて居りました。此の力士が、「先生一つ晝を私にかいて下さい。」と頼みました。景文先生は早速承知の旨を述べました。處が一年まつても未だ晝は出来ません。二年まつてもまだ晝が出来ません。其の力士は内心、先生の頼み甲斐のないのを恨んでゐました。

すると三年目の末になつて先生の所から、

「晝がやつと出来たから、取りに来てくれ。」といふ知らせがありました。

力士は、今頃になつてと思ひましたが、とに角、とりに参りました。すると先生は、

「非常に長くなつて済まなかつた。」と、言ひ乍ら其の晝を力士に渡しました。

力士が受取つて見ると、唯六尺ばかりの重簾の弓がかゝれてあるばかりです。餘りの事に其の力士は呆れ果て、不満足の色を顔に現はしました。

すると先生は

「まあ不足だらうが、圖取に見せたいものがあるから此方へ来て呉れ。」と言ひました。力士は不

精々々に其の後について別室へ案内されました。

見ると其處には、大きな長持が二個並んでゐます。先生は其等の蓋を取つて

「さあ中を見てくれ。」と、力士に促しました。そこで力士が中を見ますと、何やら下書き様のものが兩方ともに一杯あるのでした。上の方のを一掴み掴んで出して見ると、果して弓の晝の下書であつたのです。

一枚二枚三枚、數へたら何枚あるか分りません。力士は始めて先生が此の弓の晝をかく爲に三年の長い月日を、丹精をこらされたかと氣がつかしました。

「先生どうも何にも知らないで、ホントに有難うございました。有難くあの弓の晝を頂戴いたします。」

と、力士は感極つて涙を流してお禮を述べたといふことであります。

景文先生が如何に晝の爲に苦心を積れたか、又先生の人柄がどうであつたか、といふことは之によつても分ります。

天下に名を成す。前の夜具の話といひ、後の弓の晝と言ひ、何と至難の事ではありませんか。

一〇 書仙 柯亭翁

昔といつても、其様に古いことではありません。あの西南の役があつた明治十年の頃でありました。所は朽木縣のある村、家は村長様の住居の前、其處へ天から降つたか、地から湧いたか、一人の老人が飄然と現はれました。而して村長様の門に立つて案内を乞ふのでありました。

取次の者が出て見ると、其處には、白い髯を胸迄貯へてゐる、一人の氣高い仙人の様な老人がニコニコし乍ら立つて居りました。

「何方から、何用あつて。」と取次が尋ねました。老人は

「俺はある所から来た下手な書家だが、一つ村長様に御目に懸つて何か書いて上げたいと思つて訪ねて来たのだから、よろしく取次いで貰ひたい。」と答へました。取次は其の旨を、折柄丁度家に居つた主人に傳へました。もと／＼村長様は、多少書の方に就いても心得がありましたから、「それは面白い、何か書いて貰つて見やう。」と早速客間へ案内させました。

村長様が其の老人にあつて見ますと、氣品があつて、落着きがあつて、見れば見る程、偉さうに思はれました。

「私が此の家の主人であります。……何か書き下さいますさうで、」と丁寧に挨拶をいたしました。

「これは／＼御主人ですか、初めて御目にかゝります。私は柯亭といふ下手な書家です。何か書かせて貰へば大變結構で、」と之も亦丁寧に挨拶を返しました。

其處で村長様は、取り敢へず書いて貰ふ事にいたしました。老人は手にさげて来た袋から、筆硯墨を出して仕度をしました。雪の様な紙が卓の上に展げられました。

村長様や其の召使の人々が、變な老人が何を書くかと、黙つて見詰めてゐました。老人はやがて墨を十分に含ませた筆を取つて、

春眠不覺曉。 處々聞啼鳥。

夜來風雨聲。 花落知多少。

と、あの孟浩然の詩を、一気に書き下しました。見てゐた人々がアツと言つて驚きの聲を上げました。其れも無理はありません。老人の書いた文字は、皆生きて躍つてゐる紙面から今にも抜け出しさうであつたからです。尙よく見ると、墨の色澤といひ、氣品といひ、形といひ、何一つとして不満な點はありません。書聖といはれる王羲之が再生して來ても、小野道風が現はれて來ても、とて

も是以上は書けまいといふ見事な文字でありました。

村長様の喜びは一通りではありません。先づ御禮にと、色々の御馳走を出して酒をどつさり飲めました。

不思議な老人は不思議なことに、酒は幾らでも呑みますが、下物に出したものは、少しも食べません。勿論御飯などは一粒も食べません。

而して腰にさげて来た瓢をとつてポン／＼と打ちました。又背に負つて来た一張の琴をかき鳴らして陶然として楽しんで歌を歌つて、側には人などは居ない様な風でありました。主人を始め一同の者は復、呆氣にとられてしまひました。暫くすると老人は、

「では今日は之で、また明日御邪魔をいたします。」と言つて急にかき消す様に表の方へ出て行きました。

其の翌日も亦来ました。而して文字を書いて、酒を呑んで、歌を歌つて、また何處かへ行ききました。又其の翌日も又その翌日も、かうやつて毎日老人は村長様の家へ、やつて来ては何處かへ行つて居りました。

さあ狭い村のことですから、忽ち此の不思議な老人の話が大評判となりました。

「村長様の處へ不思議なお老爺様来るさうだね。」

「私は家の寶に何か書いて貰つておかう。」と次から次へと、傳へ／＼て、しまひには村長様の家は、まるで市場の様な騒ぎとなりました。

然し老人はいくら書いてやつても、書き賃は一文も取りませんでした。唯お禮に酒を持つて行く時、喜んで呑み、呑んでは歌つて、何程人が大勢集つて来ても、さつぱり關係のない様な顔をしてゐました。

かうして一ヶ月程、不思議な老人は、書き續け、呑み續けてゐましたが、或日のこと、急に多勢の人や、硯や墨や筆や瓢や琴などを座敷に残した儘で、不意に消えて居なくなつてしまひました。

村長様始め多くの人々は、またビックリの態であります。其の後今日迄此の不思議な老人は何處へも姿を表はしたといふことを聞きません。若しかすると、また何處へか急にあらはれるかも知れません。

一一 超 風 奇 行

明治時代の賢人といへば、人は直ぐに指を中村敬宇に屈するであらませう。

此の人は書はいふ迄もなく非常に達者に書き、又文章を書かせれば千言萬辭立所に成り、之を草すること疾風の如しといふ有様であつたと言ひます。而して此の人には澤山の凡俗を超えた奇行があつたといふことであります。其の二つ三つを述べてお笑ひに供しませう。

其の一つを申し述べますと、此の人は常に起臥の時間を少しも違へなかつたといふことであります。其れが此の人の一生を通じて、一度も間違はなかつたといふから驚くではありませんか。

扱其の起臥の時間と申しますと、朝は午前の三時に起床でありまして、夜は午後の八時には臥床といふことであります。

敬宇は此の規定した時間を實によく守つたのであります。たまには何か仕事の都合で、非常に疲れる時もあるのであります。又仕事の都合で大變に寝不足の時もあるのであります。

さういふ時でも彼敬宇は決して、三時の時刻を間違へ起損ふといふことはなかつたのであります。又夜になつて、八時が来さへすれば、どんな大切なお客様が来てゐやうが、又どんな重要な會議

や集會に出てゐやうが、其様な事には頓着なしに、さつさと歸つて来て寝てしまふのが例であつたといふことであります。かゝる處にも敬宇の面目が躍如として見えるではありませんか。

其の次に述べたいことは、彼は毎朝三時に起床しますと、必ず日本蠟燭を點けて讀書をしたのであります。家の人々が、

「日本蠟燭は心を切る手数がかゝるから、西洋蠟燭を使つてはどうでありますか。」と屢々説き勧めたのでありますが、敬宇は其の度毎に、襟を正して座り直して曰ふには、

「私が蠟燭の心を切る位の勞力が一體何だ。たとひ蠟燭一本でも日本製の産物を使ふのは日本の利益である。無益であるにもかゝらず妄りに西洋品を用ひるといふことは、思ふに此の皇國を亡す本である。」

日本の國の人々が、悉く自分と同じやうに考へたなら、富國強兵などいふことは譯なく至るのである。」

と、大氣焔をあげたこともあるのであります。

又此様なこともありました。自分の經營してゐる塾の門に大書して

「貸本屋、紙屑買入る可らず。」といふ標札をたてたこともありました。

更に又敬字は其の座右に、一冊の粗末にして且偉大な大福帳を具へて居りました。之には毎日訪ねて来る人の姓名を始めとし、其の日其の日の收支の計算から、社會の出來事やら、時事の批評やら、果ては感想まで何でもかでも、手當り次第に雑然と書いて置いて、得々としてゐられた、かゝる點についても賢人を以て世の人々から許された、先生の嚴格の一端がほの見えて面白いこと、思ふのであります。

一二 良寛和尚

良寛和尚と言ひますと、上杉謙信、酒顯童子と共に、越後の三名物と謳はれてゐる偉い坊様であります。

良寛はいふ迄もなく書道の大家でありましたが、其の書の中でも假名を以て第一と許されて居ます。否假名に於ては、古來から日本に於て其の比を見ないと云はれる程、優れた書き手であります。一體此の良寛の假名の絶技は、何の研究から來たものかと言ひますと、萬葉集の所謂萬葉假名から系統を引いてゐるのださうであります。而して普通人は書を手でかく、一步進んだ人は、頭でかく、といふのが定つた事柄ですが、獨り良寛に至りましては、心でかく、即ち心の書であるから、

到底他の人の追隨することの出來ぬ境地があるのであります。

次に此の良寛和尚に就て傳へられてゐる事跡を二三述べて、如何にも人間味の勝れてゐた和尚の往事を偲びましょう。

當時、能書を以て天下に鳴つた龜田鵬齋が越後に参りまして、新潟に宿つて居りました。鵬齋は單に能書丈で其の名を天下に知られた人ではありません。當代希に見るの學者であつたのです。故に新潟の人々は此の立派な學者兼書家の噂で持切つて居たのであります。

「折角偉い人が、江戸から此の新潟にお出でになつてゐるのだから、何か記念に書いて貰つておきたい。」

かういふ願が新潟の人々の一般の希望であつたのであります。其處で大勢相談して、ある神社の大幟の文字を、鵬齋に書いて貰ふことにしたのであります。一般人の切なる願ですから、鵬齋は快よく承諾しました。

大富豪の店を開きまして、愈々鵬齋が筆を揮ふことになりました。前々から大評判のことですから、觀る者は垣き築いた様に、澤山集つたのであります。

其の衆人環視の裡で、彼鵬齋は得意満面で、巨筆を揮ひまして、墨痕淋漓將に書き了らうとしま

すと、群衆の中で
「アハハア。」

と聲をあげて笑ふものがありました。多くの人達は驚いて其の笑つた者の方へ、眼を注ぎました。すると笑つた者は更に、

「今一畫を書かなければ書にならない。」と申しました。

之を聞いた鵬齋は憤然として、聲の方を見ますと、其處には粗末な柄衣ころもを纏つてゐる、如何にも一見貧相らしい坊主が立つて此方を見てゐました。

鵬齋は、

「今一點をかけと、言つても最早幟の布の中には一點をかく餘地がないではないか。どうすれば可いのです。」

と反問いたしました。すると其の僧は言下に、「書く所がなかつたなら、其の疊の上におかきなさい。」

と、答へました。

而して其の僧侶は今一度

「ハハア」をくりかへして、飄然と其處を立去つてしまひました。

鵬齋は此の一言に心中大いに悟る所がありました。想ふに此れは補筆のことである。筆勢の激する所、何で疊と幟とを問ふ必要があらうか。自分は今幟の爲に心を囚はれて、躊躇してしまつたのは、何とも愧かしい次第である、と。

其處で人に今の様はあれは何といふ人かと、尋ねますと、人々は

「良寛様だ、良寛様だ。」と答へました。

鵬齋は遂に良寛の住居である五合庵に訪ねて行きました。而して謹んで教を請ひますと、良寛はいと懇ろに書道の精神を説いてきかせました。

良寛の眼識の偉いのはいふ迄ありませんが、鵬齋の心の廣いのも亦、稱してよろしいと思ふのであります。

良寛の頃、與次郎兵衛といふ老農がありました。何時もよく良寛に食物などを贈つて居りました。或る日此の親切な老農が、良寛に書を書いて呉れと頼みました。

和尚は直ちに墨すり流して、

「與次郎兵衛」

と書きました。すると與次郎兵衛は如何にも不審さうな顔つきをして、

「私がお願したのは、私の名前ではありません。自分の家の客間に掲げておく額の文字です。

和尚様、之ではどうもかける事が出来ませんよ。」と言ひました。

すると和尚が曰ひますには、

「稻荷様は、稻荷大明神。天満宮は、天満宮。汝與次郎兵衛は、與次郎兵衛。である。

何にも不思議はないよ。」

と諭しましたので、正直な老農は喜んで其れを貰つて歸つたといふことであります。

又或る人が和尚の文字の讀難いのに苦しんで、

「どうか讀易い字を書いて下さい。」と願ひますと、和尚は直ぐに

一二三。

いろは。

と、書いてやつたさうであります。

次に和尚の人と爲りの一端を話させう。

和尚は常に

「俺の好まないものが天下に三つある。而して其の一は詩人の作る詩である。其の二は書家の書く書である。其の三は料理人の整へる料理である。」
と、之は一體何を意味してゐるかといふと、其れ等の者が皆、大切な精神を忘れて形に囚へられたのを、嘲り笑つたのであります。

即ち坊主の坊主臭いのは坊主ではありません。味噌の味噌臭いのは、眞の味噌ではありません。つまり之と同じ譬を以て世の人に、教へたのでありませう。

又和尚は平素、大變兒童を可愛がりました。共に手鞠をついて楽しんだと言はれてゐます。和尚の歌に

霞立つながき春日を子供らと

手まりつき／＼今日もくらしつ。

と、いふのがあります。

或る日子供らと、鬼ごつこをいたしました。兒童等が窃に相談いたしましたして、

「和尚様を欺してやらう。」と、決めました。

乃て手拭でもつて和尚の目をかたく縛つて一緒にそのまゝ歸つてしまひました。子供を信ずる心

の強い和尚は、そんな事は些しも知りません。

「鬼さんこつち。」と例の可愛い聲でもう呼ぶだらう、呼ぶだらうと思つて其の儘手拭を目につけた儘翌朝迄待つて居りました。

翌朝になつて子供たちが、行つて窓に様子を窺ひますと、之は大變和尚様は、面を縛られた儘、依然として自分達の呼ぶのを待つてゐました。

「吓すまなかつた。こんな正直な和尚様を欺して。」

と、子供達は今更乍ら恥入つて、衷心から和尚に詫び、其の手拭を取つてやつたといふ話であります。

次のものは良寛の作でありますが是等をみても如何に天真な人間味の豊かな僧侶であつたか分るのであります。

○
慈しくはたつねきませ我宿は

越の山もとたり／＼に。

○
夕顔も糸瓜も知らぬ世の中は

たゞ世の中にまかせたらなむ。

墨染の我衣手のひろくあらば

まづしき人をまほはましもの。

○
世をすてゝ身を救ふ人もますものを

草のいほりにひまもとむとは。

○
やまたつの向ひの岡に小男鹿立てり

神無月しくれの雨にぬれつゝ立てり。

○
かたみとて何か残さん春は花

夏は杜鵑秋はもみじば。(辭世)

一三 机面に大書

忠臣藏で名高い、浅野内匠頭長矩公が、書を能くしたといふことは、内匠頭の生涯が、餘り劇的であつた爲に、世に廣く傳へられてゐません。

其の隠れてゐる長矩の逸事を述べて見ませう。

長矩があの大騒動を引起した、勅使響應の役目を仰せつけられました、居城赤穂を出發して、江戸を指して進んで來ました。

旅の日も重ねて、長矩の一行は大阪の萬松山吉祥寺（此の寺は生玉の南蛇坂の上に在るのです。）に駕を枉げて旅の疲れを休めました。

固より寺僧は、長矩が書をよくするといふことを、知つてゐますし、又此の寺は長矩の檀那寺でもある關係なので、早速長矩の前に罷り出まして、

「此の寺の扁額に、是非内匠頭殿の書を賜はりたい。」と願ひ出ました。

長矩は書に於ては相當の自信があります故、快よく

「それ程願ふなら、よくは書けないが、一筆揮つて進ぜよう。」

と、承諾いたしました。

住僧は非常に喜び、且つ光榮と思ひまして、お小僧を大急ぎで走らして、素紙を買ひに遣りました。

長矩は直ぐにも、お小僧が戻つて來るだらうと思ひまして、墨を磨らせて筆を握つて、待受けて居りました。

然しお小僧はなか／＼に歸つて參りません。性來短氣な長矩は、もう焦り／＼し出してゐます。

「未だ使の者は紙を整へて來ないか。」

と、机に向つた儘催促してゐます。尙其の上に、船がもう江戸に向けて出帆するといふ時間も段々に迫つて參りました。

短氣な長矩にはどうしても、お小僧の歸りを待つては居られませんでした。

其處で長矩は遂に意を決しまして、

萬松山

の三つの大文字を机の面に墨痕鮮かに大書して、お供揃を整へて此のお寺を後に出發してしまひました。

住僧はともかくも長矩が、立派に書いておいて呉れましたから、大層喜びまして、早速其の机の脚を取除けまして、其の字を其の儘机面に刻みつけまして、藍紙を以てこれに填じまして、山門に掲げたといふことであります。

筆力奇逸、今猶山門に残つてゐるといふことであります。

忠臣蔵の大立物、淺野内匠頭長矩にも此の様な面白い話が傳へられてゐるのであります。

一四 新井白石

學者から身を起して、遂には幕府樞要の位地を占め、外交問題、内政問題、經濟問題と所有問題を料理して、思ふ儘に己が手腕を發揮した。立志傳中の人、我が新井白石の傳記に就いて述べることに致しませう。

古來獨力以て名を成した人は、決して誇くはないのでありますが、新井白石の如く、全く自分の力量で、自分の運命を開拓した人は眞に僅少であります。

奮闘の人、力の人、學者であり政治家であつた此の偉人白石に、私は少年時代より私淑してゐる一人であります。

據此の白石は、何時何處で生れたかと言ひますと、明暦三年の正月、江戸は神田の柳原であつたのであります。

言ふ迄もなく幼より穎悟、凡童とは非常に異なつてゐた。

其の二三の例を之から述べて見ましよう。白石の自叙傳とも言はれる、「折たく柴の記」の中に次の様に書かれてゐます。

我が幼き比は、上野物語といふ草紙ありけり。これは寛永寺の花見に人のひれ來る事どもをしるしゝなり。我が三歳たりし春の比にかあるべき、炬燵に足をさしてはらばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙をもとめて、すきうつしけるを、母にておはせし人の見給ひ、十が中一二は、まことの文字もあるを、我が父に見せまゐらせしを、父のともなる人の來り見しより、人々も聞き傳へて、そのうつしゝものどもを、とり傳ふる事になりたり。我が十六七歳の時、上總國にゆきしに、かしにてそのうつしゝものを見ることを得たりき。又其の比屏風に我が名を題せしに二字は其の體をなしたるものゝ、後までありしが、火にやけうせたりければ、今はそのせつものは、我がもとのほのこらず。

之に依つて見ると、白石はもう三歳の時、立派に文字をかいたのであります。

此の後は、常に戯れに筆とりて物かく事のみをしへければ、おのづから日々に文字を見しりたれど、物よむ師友とすべき人なかりかば、たゞ往來物の類などをよみならふのみなりき。戸部の家人に富田とて、生國は加賀の國の人と聞えしが、太平記の評判といふ春を傳へて、其の事を講ずるあり。(はじめは小右衛門某といふ。後には覺信といひし人なり。)夜々に我が父など寄り合ひつゝ、其の事を講ぜしめらる。我が四五歳の時に、つねに其の座に侍りてこれをきくに、夜いたくふけぬれどつひに座をさりし事もなく、講畢りぬれば、其の義を請ひ問ふ事などありしを、人々奇特の事なりといひき。

白石が幼少四五歳の時から、大人の仲へ這入つて太平記の評判の講義をきき、一度も途中から止めたこともなく、又居眠りをしたこともなく、尙威心のことは講義が了つた後で、要點を質問したとは何と驚くの外はありません。

白石が六歳の時、七言絶句を教へた人がありました。すると忽ち覚えてしまひましたから、其の人は三首迄教へたさうです。すると白石は此の三首をすつかり暗誦して其の意味を人にときゝかせたといふこととあります。

我が八歳の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふ事を教へしめらる。其の冬の十二月

なかば、戸部歸り參り給ひしかば、てねにかたはらにさぶらふ事、もとのごとく、明けの年の秋、また國にゆき給ひしあとにて謂をたてられて、日のうちには、行草の字三千、夜に入りて一千字を限りてかき出すべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日經くなりて、課はまだみたざるに、日暮れむとする事たび／＼にて、西向なる竹縁のある上に机をもち出で、書き終りぬる事もありき。また夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へがたきに、我につけられしものと、ひそかにはかりて、水二桶づゝ、かの竹縁に汲みおかせて、いたくねぶりの催にぬれば、衣ぬぎすて、まづ一桶の水をかゝりて、衣うちきて習ふはじめひやゝかなるに目さむる心地すれど、しばし程へぬれば、身太たゝかになりて、また／＼眠くなりぬれば、又水をかゝる事さきの如くす。二たび水をかゝりぬるほどには、大やうは、課をもみてたりき。これ我が九歳の秋冬の間の事なりき。

白石の奮勵勉學は、ホントに涙ぐましい程であります。後年大儒となる、豈偶然ならんやであります。

かういふ様に白石は、勉強しましたから、十一歳の頃には、お父様の代筆が立派に出来、十三歳の時は主君戸部の書記をするやうになつたのであります。

白石の幼時を述べれば、まだ偉いことは澤山ありますが、此の位にしておきます。後仔細があつ

て、白石の父は主君から離れて、浪人したのであります。

其れから白石は、並々ならぬ苦學をいたしました。決して志は折れなかつたのであります。どこ迄も自分の力で進んで行く、決して他人の助けは受けまいといふのが、白石の信念でありました。

今の大學の學生などには、自分の方から進んで富豪のお婢さんにもなりたいたいといふ人が幾らでもあるのですが、白石は決してさうではなかつたのです。

或る時、住倉了仁といふ人が、或る豪商の處へ、養子に行つてはどうかと、白石に勧めたのですが、固より自力宗の白石は、斷然として拒絕したのであります。

又或る人が、白石の窮乏してゐるのを見て、醫者は金が儲かる故、醫者になつてはどうかと言ひましたが、白石は志が其處にありませんでしたから、其れにも應じませんでした。當時天下に並ひなかつた、豪商河村瑞軒が人を介して、白石に自分の亡き兄の娘の處へ、是非養子に来て下さい。さうすれば幾らでも、黄金を出して、學問は思ふ儘にさせて上げますからと、申し込んで來ました。此の時白石は次の話を以て其の天下に二つとない様な、幸運の申込を退けてしまひました。白石の不羈獨立の精神の旺んなこと、實に驚歎に値するではありませんか。

「昔、山城の國愛宕郡に雲山といふ山がありました。其處へ遊びに行つたものが、ありましたか。山の中に池があります。其の人は其の池の邊りに行つて、休んでゐました。何だか足が疲れましたから、池の水の中へ、足を突こんでひたしてゐました。

すると其處へ一匹の小さい蛇が出來て來まして、其の人の足の親指をなめて行きました。而して直ぐにかくれてしまひました。かくれたかと思ふと、又出て來てなめては素早くかくれてしまひます。

かうしてゐる中に、其の蛇が段々に大きくなつて、後には其の親指を呑むばかりになりました。其處で其の人は、腰から小刀を抜き取りまして、刃の方を上にして、親指の上にあてたまゝ蛇の來るのを待つてゐました。かくとも知らぬ彼の蛇は、親指を一呑みにとかゝるところを、是を上げて蛇を下から上へ切りさきました。

蛇は驚いて後ろの方へ、さつと逃げました。其の人も大急ぎで側の家へ飛込んで戸をしつかりしめてしまひました。

其の家の人達は何が起つたかと、驚いて其の人を見てゐました。

すると不思議ではありませんか。大風が轟つと吹き起り、地がひどく、くらくくと震へて來まし

た。

木は倒れる石はとぶ、凡そ半時ばかり、其の騒ぎも静まりました。其の人や家の人々が、こわく戸をあけて見ますと、一丈にも餘る大蛇が、唇の上から頭の方まで、一尺餘り斬られて死んでゐたといふことであります。

之は詰り小さい蛇の時は、小刀でつけた疵は極めて小さいものであつたが、其れが一丈餘りの大蛇になると、疵も一尺あまりとなつた。即ち自分が小蛇である内は世の中からも認められないが、養子に行つて金を出して貰つて、立派な學者になれば従つて疵も大きくなる。さういふことは堂々たる男子の取るべき道でない。」

まあ右の様な意味の返事をして、遂に白石は自分の信念を押し通したのであります。

白石は此の様に鐵の様な意志をもつた偉丈夫でありましたが、一面に於て、眞に麗はしい人情の所有者でありました。

白石が當時有名な、木下順庵先生の門下に於て學んでゐた時のことであります。疾うから師の順庵先生は、白石を何處かの藩主に、口があつたら薦めたいと思つてゐたのであります。折よく加賀の百萬石の殿様から、學者を一人御世話願ひたいと、木下順庵先生の許へ頼んで來ました。

其處で先生は、白石なら自分が推薦しても、差支へを生ずることもあるまいと思ひまして、白石に加賀侯に仕へる様に先生から、お話がありました。

白石も當時は随分苦學してゐるのでから、加賀侯に仕へれば非常な出世をする譯ですから、喜んで先生の勤めに應じたのであります。

處が白石と同門の士に、岡島仲通といふ人がありました。或る日、如何にも悄れた様子で白石に向つていふには、

「君は今度、先生の推薦で前田家に仕官されるさうだが、どうか其の口を僕に譲つては呉れまいか。

もと／＼僕は加賀の産で、故郷には年老いた母が、日夜僕の學業が成つて、歸郷するのを待ち侘びてゐる。

此の間も手紙をよこして、一日も早く戻つて貰ひたい。此の頃何だか母の身體が弱つて、心細くて困るからと言つて來た、僕は母のことを思ふと、どうしても此の儘じつとしては居られない。胸はかきむしられる様に辛い。

就ては君から、先生に自分は辭すから、是非岡崎を加賀に薦めて下さい。と頼んでくれないか。

もし君の御盡力でさうなれば吾々親子の者の喜びは、此の上もない、切にお願する。」

と、血を吐く様な思ひで、岡崎は白石に頼んだのであります。之を黙つてきいてゐた白石は、固より友情の極めて厚い人でありますから、言下に自分の幸運を岡崎に譲る決心をして、

「宜しい、君の頼みは確に引受けた。早速先生の處へいつて願つてやるから、暫く待つてくれ。」と、如何にも男らしく、且つ快よく承知しました。岡崎は非常に喜んで白石と別れました。

白石は順庵先生の前に出まして、

「實は先生、只今岡崎からかく／＼と申出がありましたして、事情をきいて見れば誠に氣の毒の至りでありますから、是非私の代りに岡崎を前田侯へ、推薦して下さいませんか。私は今急に何處へ仕へなければならぬといふ身でもありません故、今度の口は先生のお取りなしによつて、岡崎が歸國出来る様、而して岡崎の母の安心出来る様、御願ひいたしたいのであります。私のことは、甚だ勝手ではありますが、又此の次に適當な口がありましたなら、其の時御世話を願ひたいと思ふのであります。私の此の願を、どうか御き、届け下されんことをお願いいたします。」

と、自分の貧苦を友のために忘れて、自分の幸運を友のために捧げて、白石は一途に友の爲に先生

にお願ひするのであります。

此の白石の申出を、つく／＼と聞いてゐた順庵先生は、感に堪へた面色で、靜に口を開きました。

「吁よく言つて呉れた。段々世が末になつて自分の利益ばかり計る人が多い中に、君の様の尊い心の持主があらうとは、扱々順庵感服仕つた。

宜しい、君の頼みはきつと引受けた、岡崎にも其の旨を傳へて喜ばしてやつて呉れ。」

と、大層白石の友情の厚いのを稱讚されました。

斯様にして、岡崎は自分の願ひ通りが加賀に儒官として仕へることが出来たのであります。

情は人の爲ならず、後白石は順庵先生の推薦で甲府侯に仕へることになつたのであります。甲府侯は後幕府に入つて六代將軍家宣と仰がれた人であります。

白石も従つて幕府の儒官となり、將又樞要の重臣として献策輔佐の大功を立てたことは歴史上有名なことでもあります。

殊に白石の偉かつたことは、歴史家としてゞあります。其の力量と學識とを最もよく現はしてゐるものが彼の有名な、藩論譜三十卷であります。

家宣薨じて後、仕をやめて餘生を著述の業に託したのであります。

要するに白石は、偉大なる學者であり、偉大なる政治家であり、偉大なる歴史家であつたのであります。享保十年五月、六十にて歿しました。然し白石の世の中に留めた足跡の如何に偉大でありしかは到底不十分な筆で書き表はすことは出来ません。

男子生れて廟堂に立つ能はずんば、死して閻魔の大王とならんと豪語した、白石は全く力の人、意志の人、自力本願の傑士であつたのであります。

一五 弘法大師

之から我が國書道の祖と言はれる、弘法大師のことについて委しくお話をいたしましょう。

大師は今の香川縣、昔の讃岐の國多度郡に生れた人であります。流石に後年、大師様と言へば弘法大師と定められる程あつて、生れる時から、不思議なことがあつたのであります。其れは大師のお母様阿刀氏が、梵僧が其の懷にとび込んだといふ夢を見て、遂に腹が大きくなつて、大師を生んだといふことでもあります。

小さい時から、聰明であつたことは、今更いふ必要はありません。朝散大夫阿刀大足について學問を勉強したのであります。學問の進歩したことは目覺ましいものであつたさうです。

二十才の頃故あつて出家いたしました。石淵寺の勤操法師に従ひまして、博くくお經を修めたのであります。

大師の學識の博く深いことは有名なものであります。當時に於て、空海と言へばそれはそれは偉い僧侶であるという意味された程でありました。

かういふ様に若い時から、優れた坊様でしたから、遂に選ばれて當時の遣唐使藤原葛野麿に隨つて、入唐唐當時支那にいつて勉強する者留學生となつて、遙々と海を渡つて、唐上に參つたのであります。

其の時は、日本の桓武天皇様の延暦二十三年で、支那でいへば唐の徳宗といふ天子の、貞元二十年であつたのであります。

扱空海は、唐の都長安に抵りまして、方々のお寺に參りまして、立派なお坊様を求めましてお經の勉強をいたしました。其の傍、書の方もたへず研究に研究を重ねたのであります。會々慧果阿闍梨に遇ひました。處が此の阿闍梨が一目空海を見ますと、

「私は此様な立派な相を俱へてゐる人を見たことがない。私は此の人に自分の持つてゐる總べてを授けてやらう。」

と、言ひまして直ちに空海に灌頂の式を施してやりまして、又阿闍梨の位と、色々の佛教に必要な大切な道具を與へてくれました。而して日本に歸つたら、どうか佛の教をひろめて貰ひたいといふのでありました。

之を見ても空海が、如何に偉かつたかが分ると思ふのであります。

又賡賚^二天竺の池の名^二の般若三藏といふ坊様が、華嚴六波羅密經等の澤山のお經を以て空海に贈つたのであります。

空海は此の他、書法の方のお手本なども、それは／＼どつさり持つて、大同元年即ち平城天皇様の御時に歸朝したのであります。

大師が書に勝れて居つたことは次の一事でもすぐに合點できるのです。それは長安に居つた時、大師の能書のこと唐人の間にも、知れ渡つてゐたのです。それですから、唐の天子様の御殿の壁書、それは王羲之といふ人が書いてゐたものですが、それが壁が損じたので、随つて文字も破損してゐたのを、大師に命じた、其の缺けてゐた所を書かせたといふことであります。

唐人のことですから、書にかけては本家本元であります。其の本家本元では誰も王羲之の文字の破損してゐる所を書き得る書家がない、止むを得ず他國の留學生である空海に命じて書いて貰つた

次第で、本場に於ても空海が第一等の書き手であつたのであります。

空海は歸朝しますと、時の天皇様から、早速宮中に於て、諸宗の偉い坊様達を集めた所で佛法に關する色々のことを議論する様にと、命ぜられました。

其處で空海のその偉い坊様達と、議論しましたが、誰一人として空海に勝つものはありませんでした。

其處で天皇様が仰せられるには、

「空海は本とうに學問も博いし、辨舌も優れて偉い坊様である。」

と、畏くもおほめになつたので、他の坊様達も、真から空海の偉いことに成じ入りました。後大同上皇様は空海の説く佛の道を、大變お悦びになつて、遂に空海の手によつて、灌頂の御儀式をお受けになつたのであります。

天長といふ年號の初めに、それは／＼非常な早魃がありました。民の歎きは酷いものでありました。

天子様は大層御心配遊されて、空海に勅を下して雨が降るようになつてと祈禱をせよと仰せられました。仰せを畏つて、空海は熱誠をこめてお禱りをいたしました。すると不思議なるかな、今迄晴れ渡

つてわた空に黒雲が、ムク／＼と湧いて出まして、車輪を流す様な大雨が、三日三晩も降り積まされたので、今の今迄、萎れかへつてわた草木を始めとして、所有ものが甦へりました。之によつて深山の人々か救はれたことは申す迄もありません。何と空海は偉い坊様ではありませんか。

又空浦が或る寺に参りますと、その寺は一滴の水もありません。そこで空海がお祈りをいたしますと、寺中に忽ち水が湧き出たといふことであります。今の龍泉寺といふのは此の寺であるさうです。

又此の空海が、不動使者の法といふものを、修しますと身から赫々と燃え上がる眞紅な焰を出したさうです。

更に又空海が眞言の祕法を唱へますと、室の内でも忽ちに池となつてしまつたこともあつたと傳へられてゐます。

それから又、空手で空に文字を書きますと、文字の形がはつきりと、空中に顯はれ出たと言ひます。

又或る時、空海が流れ行く水の上に、筆を以て文字を書いたさうです。すると不思議や墨の痕が、その儘水の上に残つて何時迄も消えなかつたといふことであります。

空海は随分方々を廻り歩いた坊様であります。而していたる所に、色々の奇蹟を残して歩きました。

その一つを書いて見ますと、石芋といふことであります。或る欲深のお婆様がありました。籠に一杯を、芋畑から掘つて行つて、或る川の邊りで、芋臼にその芋を入れてゴシゴシと洗つて居りました。

其處へ一人の坊様がスタ／＼とやつて参りました。而して

「お婆様、すみませんがその芋を少しばかり晩のお齋いらいに頂かしてはくれませんか。」

と頼みました。

欲深婆様はジロ／＼とその旅僧の姿を見てゐましたが、

「之はねえ、かう見ると芋の様に見えますがね、實は芋ではなくて皆石ころですから、とても食べられませんね。」

と、如何にも欲深婆の言ひさうな事を言つて、此の旅僧の申出を断つてしまひました。旅僧は婆様の言葉をきくと素直に、

「あ、さうですか、石ですか、それぢやあ貰つても仕方がありませんね。」と言つてその儘そこを

去つてしまひました。

欲深婆様は

「旨くあの坊主を欺してやつた。」と赤い舌をペロリと出しました。洗ひ終つて家へその芋を抱いてもつて行きました。

而して晝のお菜にする爲に、鍋に入れてグツ／＼煮ました。婆様はもうよい頃と思つてお箸で芋の一つを、突つついて見ました。ところが、まるで石のやうに堅くてとても箸が通りません。

不思議に思つて、尙他の芋を突つついて見たが矢張り堅くて、どうにもしやうがありません。

「まだ煮方がたりないか知らん。」と尙よく煮て見ましたが、煮れば煮る程石の様に堅くなつてしまつてどうにも仕様がなくなりました。

其處で流石の欲深婆様も、仕様がありません故、その芋を再び川端へもつて行つて、残らず捨てしまひました。

今でも所々に此れと似よつた話の芋が、川の縁に青々とした芽を出してゐるのを、私はよく見受けるのであります。

此の時の坊主は多分大師であつたのでありませう。

まあ大師が諸國を巡つてゐた時には、こんな不思議なことも、稀にはやつたかも知れません。大師は諸國を巡つて、佛の像を刻んでは寺々に納めたと言はれてゐます。

大師が、あの名高い高野山を開いて、金剛峯寺を創めて建てたのは、弘仁七年の頃であつたさうです。

空海は承和二年三月、高野山で大往生を遂げたのでありますが、之についても不思議な話が残されてゐます。

何でも入寂する七日前から、諸々の弟子たちと、彌勒の寶號を念じてゐたさうです。處が七日目即ち大師入寂の日にいたりまして、忽然として息が絶えたのださうであります。大師が息を引取つて仕舞つて後、約五十日間といふものは、身體が温くて髪や鬚が段々と長くなつたので、お弟子達が其れを剃つて、其の毛を石壇を疊んで大切に其の中に藏めて置いたさうであります。

天子様も大變に空海の死を惜しまれて、勅使を遣はされて、御弔慰遊されたのであります。

空海は丁度六十二才で逝くなられたのですが、著し述べた本は澤山ありまして随分國の爲に、又人の爲になつたのであります。

延喜の御代にいたりまして悉くなくも大師號を諡されたのであります。誰でも知つてゐる彼のい

ろは歌は大師の作だと言はれてゐます。

古の本を調べて見ますと、菅原道真公は大師の後身で、小野道風は道真公の後身であるといはれてゐます。

之を見ても大師は日本に於ける書道の祖であると言つてもよいと思ふのであります。而し大師が唐に在る時、ついで學んだ先生の名は韓方明といふ人でありませう。

大師が書に優れて上手であつたといふ話を今一つして此の長い話を終りといたします。

其れはあの字が大變にも上手でいらつしやつた嵯峨天皇様が、或る時空海に、常に大切にしていさせられる唐人のかいたお手本を、お見せになりました。

すると空海は、

「陛下、恐れ乍ら此れは唐人の書ではなくて此の私めの書いたものであります。」

と、申し上げました。

天皇様は

「何で左様のことがあるものか、之は確に朕が觀る所では唐人のかいたものであるが、然し汝がさういふ所を見ると、それには何か證據があつてのことであらう、さあその證據を示しなさい。」

と仰せられました。

空海は

「それでは陛下此處をご覧下さい。」

と、言つて、軸の合せ目をといて見ました。見ると、「某年某月書之於青龍寺、沙門空海」とありました。之には嵯峨天皇様も遂にも敗けになつたといふことであります。

かういふ様に空海は書に勝れてゐましたから、唐人から

五筆和尙（執管、簇管、撮管、搦管、搨管を五筆といひます。兩手や口や兩足でかく様な藝當ではありません。）と言はれたのも、誰に無理もない次第と思ふのであります。

一六 酒屋の帳付

北村三立の號を雪山と申しました。世間の通りは雪山の方が、ずつと好いのであります。

此の雪山は、九州は肥後の人であります。性質が順る磊落でありました。諸國を巡遊しまして、遂に歸化人である雪橋（此の僧は支那から日本人に歸化した坊様です。）に就て書を覺んだのであります。

雪山は前に一寸申しました様に、性質が極めて小事に頓着しない、明け放しと言つた方ですから、貧乏などはビクともしないのであります。

家の柱が傾かうが、障子や雨戸が破れて、風が吹き込まうが、屋根が破れて、雨が漏らうが一向気に止めません。

何處を風が吹くかといふ様な態度の人でありました。

之に就て面白い挿話があります。或る時非常に偉い大雨が降りました。彼は書を一所懸命に習つて居りました。

ところが大變です。屋根は壊れた儘ですから雨は遠慮なく、ポトン／＼と漏つて來ました。而して彼が字をかいてゐる紙上に點々と地圖を作るのでありました。之には流石の豪傑も、弱つてしまひました。

「何ぞよい工夫がないものか。幾ら此の方が呑氣でも、かう雨に紙を濡らされては書いてゐられない。」

と思案してゐました。

其の中に、彼は何か好い思案を得たのでありませう。立上つて裏手においてある、大きな盥を抱

いで參りました。

「之を天井から釣下げて、其の下に居れば天下太平だ、何と巧い工夫ではあるまいか。」

と、彼は言ひ乍ら、且ニコ／＼し乍ら、其の盥を、天井から荒縄でつるして、其の下に納つて、字を習つて止めなかつたと言ひます。

盥の下に平然と習字をしてゐた、彼雪山の風事が眼の前に髣髴として浮かぶではありませんか。次にお話することは、彼が諸國を巡つてゐる時の事柄の一つであります。

彼が巡り巡つて、或る時肥前の國の長崎に參つたことがありました。因より立派な旅館などに宿らうとしても、向ふで泊めて呉れませんし、又自分でも泊らうなどと考へては居りません。

到る處皆吾が宿舎といふ様な考でゐますから何處へ寝ても一向苦にならないのであります。彼はとある大きな橋の下に一夜の宿を求めて、安らかな夢を結んだのであります。

やがて、東が白んで、鶏が鳴いて夜が明けました。彼は十分に睡つた快さを味はひ乍ら、橋の下から這ひ出て、歩くともなく東の方に歩を進めました。見るとガラ／＼と戸をあけてゐる家がありました。

彼が何心なく其の家を覗くと、ブーンと彼の鼻をついたものがありました。彼はズカ／＼と其の

富の中へ這入つて行きました。

其の家は酒屋であつたのであります。彼は酒が好物であつたのであります。

「おい酒をそのコップで一杯くれないか。」と言ひました。起きたばかりの酒屋の小僧は目をパチ／＼させ乍ら、やつと一杯の酒を彼の前に置きました。彼は取り上げてグウツと唯一息に呑んでしまひました。

「肝甘露々々、天の美酒、地の毒薬、小僧もう一杯。」

小僧は又酌んでやりました。彼は呑む呑む、しまひには呂律も廻らぬ程に酔つてしまひました。而して何時迄たつて止めて歸へりません。其處で酒屋の主も少し變だと思つて。手をもみ乍ら、

「旦那様、朝から大層よい御機嫌で、へへへ、もう随分お召上りになりましたから、今日は此の位で切り上げて、又お呑みになつたら如何でございましょう。」と言ひました。

醉眼を見開いた雪山は、

「あゝ亭主か。之は朝から済まなかつた、どれそれではお暇いたすでしょうか。」

「誠に有難うございました、では恐入りますが酒代を頂きたうございます。」

「何、酒代、あゝ俺はお金は一文もないよ。」

酒屋の亭主は驚いてしまひました。散々酒を呑んだ擧句、お金がないといふのですから無理もありません。

「御戲言ばかり仰しやつて。」

「いや戲言ではない、本當に金はない。」

亭主は、此れは飛んでもない人間に出會してしまつて、困つてしまひました。

「お金の持合せがないと仰くやるなら、お宿の方へ頂戴に上がります故、どうかお宿をお教へ下さる。」

と、頼みました。

「ウムムム、ははあお宿か、橋の下、天下の浪人者、昨夜はあの太橋の其の下にて安眠いたして候。まるでどちらがお客やら、主人やら譯が分らなくなつりました。

主人も困り果て、しまひました。

「それでは御商賣は何職業でございませうか。」

「職業か、それ／＼手書だよ。」

「書家ですか。」

「さう／＼、まあさう言つたものかね。」

處が此處の主人も一寸變つてゐるのです。自分の商賣の方が忙しいので、此の頃は、帳面の記入もろくにしてありませんから、どうせ酒代は取れないなら、暫く家に居て、帳面をつけて貰ひ、そして酒代にかへて頂かう、と腹をさめて、

「それでは済みませんが、自分の家も見られる通り無人、此の節は商賣が忙しいので、帳面もつけられませんから、酒代の代りに帳面を付けて貰へないでしようか。」

「オウも易い御用早速承知いたすでござる。」

と、とう／＼雪山は此の酒屋の帳付となつて其の日から、其の酒屋の帳場に坐りこみました。而して酒屋の帳面を毎日仕付けてやりました。處が雪山は實に見事な文字で帳面を付けるので、殊に學問のない酒屋の主人には、其の帳面に何が付けてあるやら、さつぱり分らなかつたといふことであります。

最後に今一つ雪山が、最も優ぐれた書家であつたといふことを述べて此の話を終ることにいたしましたしやう。

其れは或る國の殿様が、額の文字を支那の能書の士に頼んで、書いて貰ふことにしたのであります。

す。

其れで其の文字の下書を、此雪山に命じ書かせられたのであります。

殿様の仰せを畏つてお受けしましたが、雪山は、折悪しく大筆を持つてゐなかつたのであります。其處で彼は、軒にかけてあつた簾の蓋をとりました、打ひしいで之を大筆の代りとして、額の文字の下書をやつたのであります。

殿様は、早速御家來を支那にお遣りになつて、彼の地の能書家に、

「どうか、かういふ文字をかいて貰ひたい。」

と雪山の書いた下書を見せて懇ろに頼みました。其れを見た支那の能書家は

「さても／＼能く書かれてゐます。これ程立派に書く人は、支那の地にもさうはありません。之ならわざ／＼此方で書いて上げる必要もありません。」

と、非常に雪山の書を賞讃して、其の儘送りかへしたといふことであります。本場の支那の人が、真から感心したのですから、之に依つて、雪山の技能が如何に勝れてゐたかは知ることが出来るのであります。

雪山の書、遂に唐人の墨を磨す。又我が國の名譽と言はねばならないのであります。

毛硬
新書方教育精義 終

著作
所有

昭和五年五月二十五日印刷
昭和五年五月三十一日發行

【定價金參圓五拾錢】

毛硬
新書方教育精義



大賣所

東京 文藝堂
大阪 文藝堂
名古屋 文藝堂
東京 文藝堂
東京 文藝堂
東京 文藝堂

(京都) 京都書局
(久留米) 久留米書局

(京都) 京都書局
(京都) 京都書局

(佐賀) 佐賀書局
(熊本) 熊本書局

大長木
岡崎

發行所 東京市神田區錦町三丁目九番地 東洋圖書株式會社
大阪市南區內安堂寺町一丁目二八番地
總發東京一〇三七番・總發大阪三九五五六番

著者	齋藤梅雄
發行者	永田與三郎
印刷者	前田宗松

前本館中・前本館



昭和五年

圖書目錄

【書育教の書圖洋東】

刊新最	刊新最	版重	版五	版五	版九	版八十	刊新最
<p>最新 井茂次郎先生著 北豊吉先生序 定料 二・六〇</p>	<p>文部省實業補習教育主事 岡篤郎先生著 定料 二・〇〇</p>	<p>進歩的 砂川寛榮先生著 定料 二・六〇</p>	<p>教育者 入澤宗壽先生著 定料 二・〇〇</p>	<p>教育科 野村教育大伴茂先生著 定料 三・八〇</p>	<p>各科 奈良女高師校長 横山榮次先生序 京都女師主事 渡邊平三郎先生著 定料 二・八〇</p>	<p>實際的 奈良女高師教授 本庄精次先生序 守田保先生著 定料 二・八〇</p>	<p>文部省 鈴木治太郎先生著 大野市前理事 定料 二・六〇</p>
<p>□ 忘れられたる學校衛生、本書は長年月忠實に本問題を研究實施されたる苦闘の記録。各々の伴侶と共に學校衛生も亦高潮すべきもの。各位の伴侶とさるべき新書。</p>	<p>□ 本書は著者多年多くの著者に精説論究したる豊富な資料を壓縮したエッセイである。及此種講習用参考用として空前の良書。</p>	<p>□ 本書は教育の社會的方面の強調學校家庭の連絡進み行く教育の實相と之が對策を詳述するに、算術に、テストに、準備教育に最も多の新研究を詳説せる必讀の良参考書。</p>	<p>□ 教育最終の問題は教師其の人の人格にある。この第一義論に基き斯界の權威入澤先生が現代教育者の進むべき本道につき其の蘊蓄を傾倒せられたる唯一の良書である。</p>	<p>□ 行詰れる現代の教育。主眼の教育に置換へらるべき教育科學一測定・實驗・診斷—につき詳述せる本邦唯一の良書。</p>	<p>□ 著者自ら十餘年間附屬小學にて教壇に立ち乍ら實施されたる實際的理論的體驗集。職業指導を考へ個別教育を高潮する現代教育者再三讀みの必須書。</p>	<p>□ 舊案を機械的に繰返した成績考査法を科學的實際的に全教科に互り詳示する。</p>	<p>□ 責任ある成績考査は入學兒童推選及教育効果の自省に肝要本書は其唯一無二の参考書。</p>

行發 社會資合式株書圖洋東 京東大

番七三〇一東京管帳。地番九目丁三町錦區田神市京東
番六五五九三阪大管帳。八二目丁一町寺堂安内。區南市阪大

【書圖洋東は書育教】

版六	版二十	版二十	版重	版五	版五	版六
<p>最近 奈良女高師 小川正行先生著 定料 二・八〇</p>	<p>學習 奈良女高師教授 木下竹次先生著 兼附屬小學主事 定料 二・八〇</p>	<p>學習 九州帝大 松濤泰巖先生著 定料 二・〇〇</p>	<p>日本文化 早稻田大學 稻毛詔風先生著 定料 二・〇〇</p>	<p>兒童 東洋大學 岡寛之先生著 定料 二・〇〇</p>	<p>兒童 東洋大學 岡寛之先生著 定料 二・〇〇</p>	<p>人間 東洋大學 下田次郎先生著 定料 二・六〇</p>
<p>□ 古き訓練は個人を主とし剛體あるを願みず。特に此點を力説せられたるは本書の一特色。</p>	<p>□ 洋の東西を通じ訓練の良書なき折初造詣深き著者が蘊蓄を傾倒せられたる一大快書。</p>	<p>□ 學習心理より兒童中心への基調を闡明する。尤も兒童心理より學習様式を分説し其基調に基く學習の新指導法をも示さる。</p>	<p>□ 學習主義の根柢をなす學習心理を詳説し教師中心より兒童中心への基調を闡明する。尤も兒童心理より學習様式を分説し其基調に基く學習の新指導法をも示さる。</p>	<p>□ 著者は眞面目なる創造教育の主張者にして明治、大正、昭和にかけての貢獻者である。輸入文化、模倣文化に非らざる獨特の日本文化を創造し之が教育諸問題を論じ盡さる。</p>	<p>□ 著者は我國兒童心理學の奮斗で文部省顧問。本書の内容は兒童の身體及精神の兩方面及其の發達の實際と機能とを詳細に研究されたる現代教育界の一權威書である。</p>	<p>□ 人間味の教育は冷に非ずして暖、知に非ずして情、高潮、部分に非ずして全體の教育。著者自身最も人間味に富む教育界の耆宿。厚實多端多趣味にて定評ある典型的紳士。</p>

教育教授參考書

行發 社會資合式株書圖洋東 京東大

番七三〇一東京管帳。地番九目丁三町錦區田神市京東
番六五五九三阪大管帳。八二目丁一町寺堂安内。區南市阪大

【書圖洋東は書育教】

版五	刊新最	版八	版五	版十	版重	版五	刊新最
東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇
東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇

行發 社會資合式株書圖洋東 京東大
番七三〇一京東管帳・地香九目丁三町錦區田神市京東
番六五五九三阪大管帳・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大

【書育教の書圖洋東】

版一十	版重	版二十	版五	版五	版重	版五	版二十
東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇
東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇	東京女高師 山内典田 淺黄 坂本 田代 齋藤 先生共著 作業主義の諸様式 送料 二六〇

行發 社會資合式株書圖洋東 京東大
番七三〇一京東管帳・地香九目丁三町錦區田神市京東
番六五五九三阪大管帳・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大

【書育教の書圖洋東】

版八	版五	版五	刊新最	版八	版十	版十	版十
青年訓練所の経営	地方改善 補習學校経営の實際	地方改善 補習學校経営の實際	職業指導 高一・二の學級經營	生活指導 尋六の學級經營	生活指導 尋五の學級經營	遊びより 尋四の學級經營	遊びより 尋三の學級經營
阿部信行閣下序 石田利作先生著 送料二・五〇	阿部信行閣下序 石田利作先生著 送料二・五〇	阿部信行閣下序 石田利作先生著 送料二・五〇	山路兵一先生著 送料二・五〇	山路兵一先生著 送料二・五〇	山路兵一先生著 送料二・五〇	山路兵一先生著 送料二・五〇	山路兵一先生著 送料二・五〇
昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月
七							

【書圖洋東は書育教】

版五十	版十二	版九	版二十六	版新最	版一十二	版三十	學校經營參考書
遊びの尋二の學級經營	遊びの尋一の學級經營	續學法と各學年の學級經營	各學年の學級經營	學級經營	學級經營	學校經營	學校經營參考書
山路兵一先生著 送料二・五〇	山路兵一先生著 送料二・五〇	清水甚吾先生著 送料二・五〇	清水甚吾先生著 送料二・五〇	北澤種一先生著 送料二・五〇	北澤種一先生著 送料二・五〇	花田甚五郎先生著 送料二・五〇	學校經營參考書
昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月	昭和二十一年三月
六							

行發 社會資合式株書圖洋東 京東

番七三〇一東京管轄・地番九目丁三町錦區田市京東
番六五五九三版大管轄・八二月丁一町寺堂安内・區南市阪大

行發 社會資合式株書圖洋東 京東

番七三〇一東京管轄・地番九目丁三町錦區田市京東
番六五五九三版大管轄・八二月丁一町寺堂安内・區南市阪大

【書育教の書圖洋東】

版五	版五	版重	版四	版三	版二十	刊新最	版重
東京女高師 田原美榮先生著 直観と尋一の教育	本位 尋一教育資料大集	奈良女高師 永田興三郎編 大初等教育史上に残る人々とその苦心	奈良女高師 池田こぎく先生著 私の教育記録	京大 小西直先生序 青木文子女史抄譯 母より先生へ	奈良女高師 永田興三郎先生著 新聞記事を経済の話	愛知縣津島 鈴木羽村先生著 文検習字科精義	東洋大學教授 小林好日先生著 現代詩鑑賞
送料 二〇六	送料 六三〇	送料 二〇六	送料 二八〇	送料 二〇六	送料 二二〇	送料 二八〇	送料 二〇六
□著者は多年作業主義の實施實現に苦心に □低学年教育に造詣深く本書、其體驗記録、 □直観を重視し作業を本位としたる新時一教 育の實際は詳細を盡し具體的に示さる。	□各高師指導の下に編纂せる一大力作 □尋一教育に關するあらゆる資料を蒐集し且 □其取扱法につき詳述せる眞に初等教育家座 右の友として至便なる一大寶典。	□本書記する二十餘家の表面華々しき成果の □裏面には慘憺たる苦心を秘めてある。 □此は敬すべき記念碑は後進者指導の無二の □良師にて後進の諸人も考へさせられる良書	□教育の根本態度に初まつて教育上の改革方 □針と其の實例とを獨特の明文を以て示さる □更に其體驗されたる合科學習の實際を丹念 □に記録されてある教育文藝としても面白い	□青木夫人は子供の問題について此原著程暗 □示と開發とを興へたものはないと申さる。 □小西博士は子供を眞の子供にまで育てあげ □る情熱の巨火であると推察してをられる。	□朝日新聞、毎日新聞の經濟欄を寫眞として □引用し、獨特の方法にて通俗的に説明さる □悉く著者の體驗を教育的の説明振りを以て □した比類なき分り易き良書である。	□文檢には要領とコツがある。著者の指導し □た會員から三年に四十四名合格者を出した □本書は最少時間と努力と費用で合格する體 □普通二年又三年天才なら一年の準備で合格	□文學は即ち人生の表現批判會である。 □本書は詩の味ひ方、新體詩、自由詩、民謡、 □短歌、泰西名詩篇の研究等現代詩のあらゆる □方面に研究を及ぼした良書である。

行發 社會資合式株書圖洋東 京東大

番七三〇一京東管攝。地香九目丁三町錦區田神市京東
番六五五九三阪大管攝。八二目丁一町寺堂安内。區南市阪大

【書圖洋東は書育教】

版重	版五	版重	版重	版七	版重	版重
立正大學 千葉命吉先生著 「問題」の教育心理學的考察	奈良女高師 上島直之先生著 最新 歐米教育の實際	岡崎師範附屬小學校著 生活深化の眞教育	富山師範附屬小學校著 ホーム組織の學校經營	奈良女高師 鶴居進一先生著 合科學習と其一般化の研究	東京兒童の村 志垣 寛先生著 新學校の實際と其の根據	文部會社會教育課長 小尾純治先生序 奈良女高師 高田高等女學校長 井上三郎先生著 社會教育 一日女學校
送料 二八〇	送料 二八〇	送料 三三〇	送料 二八〇	送料 二〇六	送料 二八〇	送料 二〇六
□獨創學の樹立者千葉先生は歐米留學實に五 □年其の根本的研究を遂げらる「問題」は獨創 □學の中心點であり自發學習の出發點である □本書は獨創的自學法の心理的の説明書である	□奈良女高師前教授たりし先生が命により英 □米獨佛に遊學され専ら初等教育、補習教育 □の實際を研究されたる新著作。 □精細と深淵とを極めた點に於て他に例なし	□天下の優良附屬たる岡崎師範附屬小學校が □新を街はずみに走らず努力又努力血と汗と □熱と涙とを以て築き上げられたのが本書。 □百々句々若しき經驗と尊き體験との結晶。	□澤柳先生の國民教育獎勵會より表彰され □る初等教育界に誇るべき眞面目の研究書。 □實績を収めつゝある實際的記録で昭和現時 □代に即したる眞の學校經營法である。	□奈良女高師に於ける合科學習の先驅者たる □先生が新を街はずみに走らず努力又努力血と汗と □熱と涙とを以て築き上げられたのが本書。 □百々句々若しき經驗と尊き體験との結晶。	□新學校の意識、組織、校舎、教師、兒童、 □學級、材料、方法等を明かに具體的に説明 □歐米の新學校並に我國に於る新學校の實際 □と其の根據を教育的哲學的見地より詳論。	□本書は處女教育女子青年教育の實際に成功 □されたる社會教育方法の實際記録である。 □費用少く特別の勢力なくして新教育思潮に □添つた簡易有効の教育法として推薦さる。

行發 社會資合式株書圖洋東 京東大

番七三〇一京東管攝。地香九目丁三町錦區田神市京東
番六五五九三阪大管攝。八二目丁一町寺堂安内。區南市阪大

【書育教の書圖洋東】

刊新最	版五	版六	版六	版八	版二十	版重	版重
<p>奈良女高師 鶴居滋一先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>奈良女高師 大松庄太郎先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>白井繁太郎先生著</p> <p>送定料價 二・四〇</p>	<p>白井繁太郎先生著</p> <p>送定料價 二・四〇</p>	<p>奈良女高師 梶井 弘先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>奈良女高師 梶井 弘先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>東京高師 川島次郎先生著</p> <p>送定料價 三・三〇</p>	<p>東京高師 川島次郎先生著</p> <p>送定料價 三・三〇</p>
<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・四〇</p>	<p>送定料價 二・四〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 三・三〇</p>	<p>送定料價 三・三〇</p>
<p>□ 國語算術等の地理教材を如何に取扱ふかの 事五以上の地理教育の準備を示さる。</p>	<p>□ 廣く入學以前より尋四に入る迄の地理教育を 考へ且其具體案を示されたる良書。</p>	<p>□ 修身教育に對する根本の立場を明かにす。 □ 大に例話調辭格言道歌作法法的教材等の本 質を明かにし其陶冶價值を決定す。□ 最後 に取扱の原理と取扱の實際問題とを解決す</p>	<p>□ 世界最古の文明を生んだ東洋の歴史——現 代文化の源を明にすべき通俗的良書である □ 正確なる史實を基とし人物の逸話物語を緯 として趣味深き物語體とさる。</p>	<p>□ 本書は前者國史學習の根本及其實際をより よく徹底する爲に一々具體事例を附したる著 □ 國史の資料、學習指導の端緒を明かにし國 民精神の涵養民族的純情の陶冶を力説さる</p>	<p>□ 學習主義に基き多年研究された體験より歸 納された獨特の國史學習法を詳述さる。</p>	<p>□ 獨特の資料公開——文部省修身書編纂委員 たる著書が長年月蘊蓄の天下一品の好資料 を披露さる。</p>	<p>□ 原譯中解のものは閱讀に便する爲、漢文 には譯文、難語句、注意すべき事項、異説 等には註を加へ参考資料を添ふ。</p>

東大 京阪 行發 社會資合式株書圖洋東

番七三〇一京東管攝・地番九目丁三町錦區田神市京東
番六五五九三版大管攝・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大

【書圖洋東は書育教】

版重	版重	刊新最	刊新最	刊新最	版六	版三十
<p>廣島高師 堀之内恒夫先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>廣島高師 堀之内恒夫先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>廣島高師 堀之内恒夫先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>廣島高師 堀之内恒夫先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>廣島高師 堀之内恒夫先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>奈良女高師 野中吉光先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>	<p>奈良女高師 野中吉光先生著</p> <p>送定料價 二・八〇</p>
<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>	<p>送定料價 二・八〇</p>
<p>□ 本書は新に修正されたる高等小學修身書の 實地取扱の手引としての懇切なる力作。</p>	<p>□ 本書は一般的兒童用書を主とし之に女生用 を併設して一々丁寧に解説し何れを使用す るも適する良参考書。</p>	<p>□ 本書は内容を二目的、二教材系統、三指導 要項、四指導計畫、五教材解説説話要領、 六参考資料の六項に分ち説明懇切引例豊富</p>	<p>□ 第三は特に苦心せる實際記録。抽象的なる 教科書の例話を具體化し且例話の考察より 適切なる調辭の取扱迄示された良書。</p>	<p>□ 著者自らの體験を記録す。特に補充例話を 加へ抽象的教科書を直に活用し得る様にす</p>	<p>□ 第一二の修身の方法分らぬ爲に苦しむ士は なきか——本書は之を解決したるもの—— 本書によれば取扱上の難問題自ら氷解す。</p>	<p>□ 修身教育に對する根本の立場を明かにす。 □ 大に例話調辭格言道歌作法法的教材等の本 質を明かにし其陶冶價值を決定す。□ 最後 に取扱の原理と取扱の實際問題とを解決す</p>

東大 京阪 行發 社會資合式株書圖洋東

番七三〇一京東管攝・地番九目丁三町錦區田神市京東
番六五五九三版大管攝・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大

修身・國史・地理參考書

【書育教の書圖洋東】

版五	版五	版五	版六	版六	版五	版五	版五
奈良女高師 教材参照 河野伊三郎先生著	奈良女高師 教材参照 河野伊三郎先生著	奈良女高師 教材参照 河野伊三郎先生著	奈良女高師 教材参照 河野伊三郎先生著	奈良女高師 教材参照 河野伊三郎先生著	奈良女高師 教材参照 河野伊三郎先生著	奈良女高師 教材参照 河野伊三郎先生著	奈良女高師 教材参照 河野伊三郎先生著
國語讀本指導精案 卷八	國語讀本指導精案 卷七	國語讀本指導精案 卷六	國語讀本指導精案 卷五	國語讀本指導精案 卷四	國語讀本指導精案 卷三	國語讀本指導精案 卷二	國語讀本指導精案 卷一
送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇

□ 本書の要旨と指導の方向性——國語讀本の各課に付教材の批評吟味より指導方案の實際迄懇切丁寧に詳述する。

□ 新文章たる教材の選定を重んず——此點に於て従来の唯單に日案的時間配當的の類書と面目を異にする。

□ 讀本教育は師範の人間教育——河野先生は我が國語教育實際界の權威として常に「讀方科は單に文章を正面より讀解するに止まらず其の文章を透して其の文章の中に吾等人間の心界に起る現象を見出し獲得せしめる迄に至らねばならぬ」とされ、本書は其の見地より教材解説を最も重視された。

□ 教師自身の文章讀解指導書——本書は又右の意味より指導者たる教師の文章讀解養成の唯一の良師である。

□ 新國語教育に必携の良書——此種類本多しと雖も新國語教育を具體的實際的に知るには本書によるより捷徑はない。

□ 本書の要旨——本書は教材の要旨を「本課學習の要旨」の項下に詳述してある。昔のものゝやうに「……せしむるを以て要旨とす」といふ位でなく現代文學論の上に立つた文章観により文の教育價值から見て教

東大 京阪 行發 社會資合式株書圖洋東

東京市神田區三丁目九番地・東京總店 三〇七番
大阪市南區一丁目二番八・大阪總店 九三五六番

【書圖洋東は書育教】

刊新最	版二十	版十	版五	版十	版重	版九
奈良女高師 山崎兵一先生著	奈良女高師 山路兵一先生著	奈良女高師 河野伊三郎先生著	東京女高師 五味義武先生著	奈良女高師 秋田喜三郎先生著	東京女高師 齋藤秀夫先生著	奈良女高師 清水甚吾先生著
讀方學習活動 原論	國語學習上の諸問題 解答	國語讀本指導と其實例	國語讀本の縱斷的研究	國語參考書	新地理書學習指導精案 卷五	地理學習指導法精義
送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇	送料 〇・三〇

□ 著者が二十有餘年同専ら研究されたる實際教授を以て最近研究されたる學習法を其の遺著を披瀝されたる名著である。

□ 地理學習指導上の重要問題は悉く解決される。

□ 本書は地理學習の指導と材料の精説との兩方面に互に詳説せられたる最新最良書である。

□ 本書は斬新にして得難き材料を蒐集詳説して新時代の地理指導につき活資料を提供する。

□ 國語讀本全十二巻を縱斷的に研究し其精神其美點其長所を確實的に研究されたる良書

□ 國語學習指導の根本は讀本研究にあるとの見解から形式内容共丹念に研究されてゐる

□ 前篇は文章讀解の理論的説明である讀解以外の諸作業は附隨して悉く之を包括する。

□ 後篇は實際的解説、卷一より卷十二迄あらゆる代表教材を以て具體的に取扱を詳説する

□ 國語學習上あらゆる問題について多年研究されたる稀に見る實際中の實際篇である。

□ 上中下各學年、形式内容取扱上各方面に互つた具體事例集である。

□ 先生が讀本中の各課文章を指導された實際を最も大膽に、赤裸々に叙述されたもの。

□ 兒童學習力伸展の有様は手に取るが如く明かに且指導法も具體的に知らる。

□ 讀出する學習教養と趣を共にし長き體驗と深き思索とによつて成る力作。

□ 凡そ第一讀方教育上の諸問題は大小悉く其理論と實際とを闡明解決する。

東大 京阪 行發 社會資合式株書圖洋東

東京市神田區三丁目九番地・東京總店 三〇七番
大阪市南區一丁目二番八・大阪總店 九三五六番

【書育教の書圖洋東】

版五	版五	版七	版五	版重	版重	版重	刊新最
東京高師教授 保科幸一先生著 奈良女高師教授 木枝増一先生著 漢字整理案	奈良女高師 河野伊三郎先生著 綴方學習上の諸問題	奈良女高師 山路兵一先生著 綴方の自由教育	奈良女高師 秋田喜三郎先生著 綴方新學習法	奈良女高師 岡本清徳先生編 鉛筆書方練習帖 第一用	奈良女高師 岡本清徳先生編 鉛筆書方練習帖 第二用	奈良女高師 岡本清徳先生編 鉛筆書方練習帖 第三用	東京青山師範 齊藤梅雄先生著 毛筆新書方教育精義
送料 〇・二〇 定価 〇・二〇	送料 〇・二〇 定価 二・八〇	送料 〇・二〇 定価 三・〇〇	送料 〇・二〇 定価 二・八〇	送料 〇・二〇 定価 〇・三〇	送料 〇・二〇 定価 〇・三〇	送料 〇・二〇 定価 〇・三〇	送料 〇・二〇 定価 三・〇〇
□ 文部省臨時國語調査會が發表したるもの、 □ 國語研究者の友として至便至實の書。 □ 小學校教師、中等國語教師、高師文科生、 □ 高校文科生等の必携の書。	□ 綴方學習指導上の諸問題は悉く舉げて一々 親切に解決されたる類例なき良書。 □ 二十年の教壇生活と廣く全國を視察講演の 間に蒐集されたる問題の整理解決。	□ 綴方學習指導上の諸問題は悉く舉げて一々 親切に解決されたる類例なき良書。 □ 綴方學習指導上の諸問題は悉く舉げて一々 親切に解決されたる類例なき良書。 □ 綴方學習指導上の諸問題は悉く舉げて一々 親切に解決されたる類例なき良書。	□ 本書は秋田先生多年の研究を代表せる力作 □ 綴方學習法は課題法—系統案、自由選題法 等の變遷を重ね今や生活表現を基調とする に至つた。此過程を明にし實際指導を詳述 に至つた。	□ 本書は著者永年書道に研究し且實際指導し たる體験に基き實際的に詳述されたる良書 □ 現時の問題たる鉛筆、ペン、毛筆の三種共 に徹底的具體的良法を示さる。	□ 本書は著者永年書道に研究し且實際指導し たる體験に基き實際的に詳述されたる良書 □ 現時の問題たる鉛筆、ペン、毛筆の三種共 に徹底的具體的良法を示さる。	□ 本書は著者永年書道に研究し且實際指導し たる體験に基き實際的に詳述されたる良書 □ 現時の問題たる鉛筆、ペン、毛筆の三種共 に徹底的具體的良法を示さる。	□ 著者は新書方教育の研究家として第一人者 □ 深い體験と確たる識見を以て自ら體系付け られたる硬毛新書方教育を詳解し盡さる。 □ 統一あり而も直に實行し得る類例なき良書 □ 硬毛共に文字は形を主とし、實用を主眼と して其の書法の詳細に互り述べてある。 □ 材料は書方手本の全部に就て硬毛兩様の説 明指導を詳記せる外補充材料を加へてある

東大 京阪 行發 社會資合式株書圖洋東
 香七三〇一東京管攝。地香九目丁三町錦區田市京東
 香六五五九三阪大管攝。八二目丁一町寺堂安内。區南市阪大

【書圖洋東は書育教】

版五	版重	版重	版重	版五	版五	版五	版五
奈良女高師 岩瀬六郎先生著 原田正雄先生共著 書方學習原論	奈良女高師 岩瀬六郎先生著 兼用 尋三國語教育精義	奈良女高師 岩瀬六郎先生著 兼用 尋二國語教育精義	奈良女高師 岩瀬六郎先生著 兼用 尋一國語教育精義	奈良女高師 河野伊三郎先生著 國語讀本指導精案 卷十	奈良女高師 河野伊三郎先生著 國語讀本指導精案 卷九	奈良女高師 河野伊三郎先生著 國語讀本指導精案 卷八	奈良女高師 河野伊三郎先生著 國語讀本指導精案 卷七
送料 〇・二〇 定価 〇・二〇	送料 〇・二〇 定価 〇・二〇	送料 〇・二〇 定価 〇・二〇	送料 〇・二〇 定価 〇・二〇	送料 〇・二〇 定価 〇・二〇	送料 〇・二〇 定価 〇・二〇	送料 〇・二〇 定価 〇・二〇	送料 〇・二〇 定価 〇・二〇
□ 本書は著者永年書道に研究し且實際指導し たる體験に基き實際的に詳述されたる良書 □ 現時の問題たる鉛筆、ペン、毛筆の三種共 に徹底的具體的良法を示さる。	□ 本書は著者永年書道に研究し且實際指導し たる體験に基き實際的に詳述されたる良書 □ 現時の問題たる鉛筆、ペン、毛筆の三種共 に徹底的具體的良法を示さる。	□ 本書は著者永年書道に研究し且實際指導し たる體験に基き實際的に詳述されたる良書 □ 現時の問題たる鉛筆、ペン、毛筆の三種共 に徹底的具體的良法を示さる。	□ 本書は著者永年書道に研究し且實際指導し たる體験に基き實際的に詳述されたる良書 □ 現時の問題たる鉛筆、ペン、毛筆の三種共 に徹底的具體的良法を示さる。	□ 指導法の案出—教材の取扱は『學習指導 方案』といふ項下になるべくその指導者が 自ら適切なる方法を案出するやう教材によ り児童により工夫し創作する餘地のあるや うに記述してある。即ち指導者自身の力量 を發揮することが出来るやうにしてある。 これ又、本書の特色とする所にて他にその 比なし。	□ 指導法の案出—教材の取扱は『學習指導 方案』といふ項下になるべくその指導者が 自ら適切なる方法を案出するやう教材によ り児童により工夫し創作する餘地のあるや うに記述してある。即ち指導者自身の力量 を發揮することが出来るやうにしてある。 これ又、本書の特色とする所にて他にその 比なし。	□ 指導法の案出—教材の取扱は『學習指導 方案』といふ項下になるべくその指導者が 自ら適切なる方法を案出するやう教材によ り児童により工夫し創作する餘地のあるや うに記述してある。即ち指導者自身の力量 を發揮することが出来るやうにしてある。 これ又、本書の特色とする所にて他にその 比なし。	□ 指導法の案出—教材の取扱は『學習指導 方案』といふ項下になるべくその指導者が 自ら適切なる方法を案出するやう教材によ り児童により工夫し創作する餘地のあるや うに記述してある。即ち指導者自身の力量 を發揮することが出来るやうにしてある。 これ又、本書の特色とする所にて他にその 比なし。

東大 京阪 行發 社會資合式株書圖洋東
 香七三〇一東京管攝。地香九目丁三町錦區田市京東
 香六五五九三阪大管攝。八二目丁一町寺堂安内。區南市阪大

【書圖洋東は書育教】

版々重	版八	版九	版六	版々重	刊新最
成城小學校 奥野庄太郎先生著 定價 二六〇	東京高師 佐藤良一郎先生著 定價 二六〇	奈良女高師 坂本 清先生著 定價 四八〇	奈良女高師 清水其吾先生著 定價 三〇〇	東京高師 岩下吉衛先生著 定價 二八〇	東京高師 岩下吉衛先生著 定價 二八〇
話方教育の原理と實際	算術教育新論	最新算術學習指導法	算術自發學習發展の實際	珠算教授	算術の作業化と其精案
成城小學校 奥野庄太郎先生著 定價 二六〇	東京高師 佐藤良一郎先生著 定價 二六〇	奈良女高師 坂本 清先生著 定價 四八〇	奈良女高師 清水其吾先生著 定價 三〇〇	東京高師 岩下吉衛先生著 定價 二八〇	東京高師 岩下吉衛先生著 定價 二八〇
□ 話方及び聽方は人生生活の本質にして根本的重要事項である。	□ 算術に關する参考書多しと雖も本書の如く根本原理より實際に及ぼせるものは少い。	□ マートル法、實驗演習、空間教授の取扱、代数的取扱等の新問題を初め算術心理など他書に求め得ない新方面まで開拓されてある。	□ 算術教育界の權威清水先生の獨創的體験的研究で前後八ヶ年心血傾注の結晶である。	□ 本書は多年珠算の研究と教授とに獨特の地歩を有せられる先生が、最近適切な獨創的一新體系を立てられた無二の珠算教育法。	□ 著者は作樂教育の本山東京女高師の重鎮。算術は作樂教育の中心學科、著者は其主任が算術全般に亘り其作業化を懇説し而も之が精案を具體に示したる模範的新著。
□ 話方及び聽方の研究は従來無なりしが著者は斯界に定評ある研究家にて茲に確たる實際の参考を示さる。	□ 各學年の教材配當は廣く外國の例を取り算術遊戲の諸種を引例した算術の新書である。	□ 著者は頭腦明晰、博學熱心の新人である。	□ 算術教育の權威清水先生の獨創的體験的研究で前後八ヶ年心血傾注の結晶である。	□ 本書は多年珠算の研究と教授とに獨特の地歩を有せられる先生が、最近適切な獨創的一新體系を立てられた無二の珠算教育法。	□ 著者は作樂教育の本山東京女高師の重鎮。算術は作樂教育の中心學科、著者は其主任が算術全般に亘り其作業化を懇説し而も之が精案を具體に示したる模範的新著。
□ 話方及聽方の原理は茲に初めて體系づけられ初等教育界を裨益し延いては本書が昭和初教育史に残さるべき特色を有す所以である。	□ 算術に關する参考書多しと雖も本書の如く根本原理より實際に及ぼせるものは少い。	□ マートル法、實驗演習、空間教授の取扱、代数的取扱等の新問題を初め算術心理など他書に求め得ない新方面まで開拓されてある。	□ 算術教育界の權威清水先生の獨創的體験的研究で前後八ヶ年心血傾注の結晶である。	□ 本書は多年珠算の研究と教授とに獨特の地歩を有せられる先生が、最近適切な獨創的一新體系を立てられた無二の珠算教育法。	□ 著者は作樂教育の本山東京女高師の重鎮。算術は作樂教育の中心學科、著者は其主任が算術全般に亘り其作業化を懇説し而も之が精案を具體に示したる模範的新著。

【書育教の書圖洋東】

版十	版八	版六	版三十	刊新最	刊新最	版重	版重
奈良女高師 神戶伊三郎先生著 定價 四三〇	奈良女高師 大浦茂樹先生著 定價 三三〇	官道馨先生著 定價 二六〇	清水英一先生著 定價 二六〇	奈良女高師 池内房吉先生著 定價 二八〇	奈良女高師 池内房吉先生著 定價 二八〇	奈良女高師 池内房吉先生著 定價 二八〇	奈良女高師 池内房吉先生著 定價 二八〇
理科學習原論	理科學習指導實錄	理化學史物語	數學史物語	高二新算術書の活用	高一新算術書の活用	尋六新算術書の活用	尋五新算術書の活用
□ 本書は先生が多年實際に指導せられた體験の結晶で多くの指導例をあげらる。	□ 學習主義に基き理論と實際を巧に取合せ其實際を眺めた穩健實の實際的著書である。	□ 尚卷末には「最新世界理化年表」として大小の發明發見の事實が年代的に纏めてある。	□ 無味乾燥の算術に興味を添へ情味を加へ算術好きにするは教學史にしくはない。	□ 本書は重要なとして興味あり而も日常生活に關係の深いものを人物本位に述べた良書。	□ 本書は重要なとして興味あり而も日常生活に關係の深いものを人物本位に述べた良書。	□ 本書の長所は徹頭徹尾體験的實際的なる所にある。	□ 著者の態度がどこまでも實際重視體験感重である。
□ 加ふるに自然科学の本質を明かにし理科學習の寶庫を開かれたものである。	□ 月並の問題を他書に譲り實際に觸れたる點のみを力説されたのも又本書の長所である。	□ 尚卷末には「最新世界理化年表」として大小の發明發見の事實が年代的に纏めてある。	□ 無味乾燥の算術に興味を添へ情味を加へ算術好きにするは教學史にしくはない。	□ 本書は重要なとして興味あり而も日常生活に關係の深いものを人物本位に述べた良書。	□ 本書は重要なとして興味あり而も日常生活に關係の深いものを人物本位に述べた良書。	□ 本書の長所は徹頭徹尾體験的實際的なる所にある。	□ 著者の態度がどこまでも實際重視體験感重である。
□ 加ふるに自然科学の本質を明かにし理科學習の寶庫を開かれたものである。	□ 月並の問題を他書に譲り實際に觸れたる點のみを力説されたのも又本書の長所である。	□ 尚卷末には「最新世界理化年表」として大小の發明發見の事實が年代的に纏めてある。	□ 無味乾燥の算術に興味を添へ情味を加へ算術好きにするは教學史にしくはない。	□ 本書は重要なとして興味あり而も日常生活に關係の深いものを人物本位に述べた良書。	□ 本書は重要なとして興味あり而も日常生活に關係の深いものを人物本位に述べた良書。	□ 本書の長所は徹頭徹尾體験的實際的なる所にある。	□ 著者の態度がどこまでも實際重視體験感重である。

行發 社會資合式株書圖洋東 京阪大

番七三〇一東京管轄・地番九目丁三町錦區田市京東
番六五五九三阪大管轄・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大

行發 社會資合式株書圖洋東 京阪大

番七三〇一東京管轄・地番九目丁三町錦區田市京東
番六五五九三阪大管轄・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大

【書育教の書圖洋東】

版五	版重	版七	版七	版八	版重	版重
奈良女高師 横井曹一先生著 定料 二・八〇 送料 〇・六〇	奈良女高師 新井つた女史著 定料 二・二〇 送料 〇・二〇	奈良女高師 内田トハ先生共著 定料 三・〇〇 送料 〇・六〇	東京市 藤本光清先生編 定料 一・〇〇 送料 〇・八〇	東京女高師 寺谷朝蔵先生著 定料 二・八〇 送料 〇・六〇	奈良女高師 川口英明先生著 定料 二・二〇 送料 〇・六〇	奈良女高師 幾尾純先生編 定料 〇・六〇 送料 〇・六〇
圖書學原論	體育としての薙刀	教育のダン	小學校體操教程	小學校體操指導書	體育學習の實際	幾尾式教師用
本書は圖書教育の本質を闡明し新しき而も其本道を見出すことに努め殊に鑑賞教育構成圖案等々の新方面を詳説した多年の大作圖書教育の各分野に亘り論究したる良書。	長も皇后陛下の台覽を賜ひたる鎮心流産刀の開祖が其眞髓を記録されたものである最も困難なる形の説明に百五十有餘の寫眞を用ひ難にも其の要領を會得し得る様にす	種々の多いダンスの中で獨りこの教育ダンスのみが學校に取入れらる精選のもの。	第一から高女まで五十七種、寫眞版百餘を挿入して懇切に説明し樂譜三十餘種を添ふ	改正要目に準據し學年別に體操教練遊戯技の全部に亘り其指導法を詳述せる良書。體操については號令の掛け方より運動量の多少、遊戯については其の解説を詳述す。	舊來の體操を體育と改稱して其の範圍を擴め受動的の教授を發動的の學習となし一齊的劃一的のものなりしを個別的とした。兒童本位に獨自學習を新設した實際書。	第一に兒童作曲法を載せて先生の手解とす第二に兒童作曲法を載せて先生の手解とす第三に「本體練習幾尾式カード」を全部本體に附して掲載して指導用に供してある。

圖書・作法・手工・參考書

東大 東洋圖書株式會社發行

東京市神田區三丁目九番地。電話一〇三七番。東京市南區安堂寺一丁目二番八二。電話九三五六番。

【書圖洋東は書育教】

版重	版五	版五	版二十三	版九	版重	版重
奈良女高師 幾尾純先生編 定料 〇・二〇 送料 〇・二〇	奈良女高師 幾尾純先生編 定料 一・八〇 送料 〇・二〇	奈良女高師 幾尾純先生編 定料 一・八〇 送料 〇・二〇	奈良女高師 幾尾純先生著 定料 二・二〇 送料 〇・六〇	東京高師 青柳善吾先生著 定料 二・二〇 送料 〇・六〇	奈良女高師 神戸伊三郎先生著 定料 〇・五〇 送料 〇・五〇	奈良女高師 神戸伊三郎先生著 定料 〇・五〇 送料 〇・五〇
幾尾式力	小學校唱歌の指導書	小學校唱歌の指導書	私の唱歌教授	音樂教育	科學學習各論	科學學習各論
一名本書「カール」と稱し、本書の讀解力、記憶力養成に此上なき良カードである。	本書は先生が二十數回生徒に教へられた事實の記録に洗練又洗練を加へられたエキス取集中に巧みに具體化して織り込まれてゐる第一等二共一方針二教育の精華三教材及其指導法四加唱五補充六唱歌の順に編纂される六教材及其指導法に付し各指導要點(區分速度強弱タクト)の指導の實際的に判り易く解説す	本書は先生が二十數回生徒に教へられた事實の記録に洗練又洗練を加へられたエキス取集中に巧みに具體化して織り込まれてゐる第一等二共一方針二教育の精華三教材及其指導法四加唱五補充六唱歌の順に編纂される六教材及其指導法に付し各指導要點(區分速度強弱タクト)の指導の實際的に判り易く解説す	唱歌教授界の第一人者を以て雖もが許す幾尾先生の唯一無二の力作は即ち本書である御創始の本體教授法獨特のタクト法新しき作曲指導法等悉く寫眞版を以て説明される	本書は先生の音樂教育に關する力作で著書多先生の研究の唱歌教授法精義である。先生多年の研究の唱歌教授法に音樂教育に關する御意見は悉く本書に收められてゐる	著者は本書に蘊蓄と研究の總てを注がれた指導方案が各材料毎に詳述してある。教材を精説し細微な點まで明かにしてある	各科に亘り(1)選題の要旨(2)學習の主眼點(3)學習用具(4)學習準備(5)教材の内容(6)指導法及び學習發展の狀を詳述せる新界の名著。

音樂・體操參考書

東大 東洋圖書株式會社發行

東京市神田區三丁目九番地。電話一〇三七番。東京市南區安堂寺一丁目二番八二。電話九三五六番。

【書育教の書圖洋東】

版五	版六	版五	版五	版四	版十	版十
文部省官立 補習教育主事 千葉敬止先生著	文部省官立 九州大學教授 小出滿二先生著	奈良女高師 教授 石澤吉勝先生著	奈良女高師 教授 須山法香先生著	奈良女高師 教授 秋草ちか先生共著 中原イネ先生共著	大阪府立 清水谷高女 結城親學先生著	大阪府立 清水谷高女 結城親學先生著
小學農業教育原論	農業教育	家事學習上の諸問題	花の活け方	作法實習記錄	縫製研究	縫製研究
送料價 〇・二六	送料價 〇・二六	送料價 〇・二六	送料價 〇・二六	送料價 〇・二六	送料價 〇・二六	送料價 〇・二六
高等小學に於ける農業教育の目的本質教材 方法教師實習地經營等を闡明したる良書 著者は文部當局として高等小學農業科新要 目定の局に當り全國の實際を視察指導す	著者は九大勲任教授と文部省官立とを兼ね 又農業科實業教員檢定委員の重職にあたる 本書は先生の農業教育に關する最高唯一の 著書で尙有益なる幾多の論文を添へてある	先生は新界に於ける我が國の權威である。 本書は先生が家事學習の各方面大小幾多の 事實問題につき詳細懇切なる解決を與へら れたるもので家事學習上類例なき良書である	奈良女高師にて附屬高女の教科書に採用す 一流に備せず各流共通の基礎事項を網羅す 價低廉にして而も生涯携帯し得る美本。 女學校活花教科書の外一般參考書に良し。	我が國古來より傳はる作法中特に古典的代 表たる本膳の變遷につき一々詳説さる。 本膳變遷の食器を初め進擧の次第、食事の 作法、献立料理法のすべてを詳説す。	和服縫製に必要なメートル法の寸法を悉く 集め本誌、四ツ身から一ツ身、羽織、袴、襦袢 等の裁ち方を悉く圖を以て示さる。 小學校女學校の裁縫科生徒用に良し。	本書は斯界の權威結城先生半生の苦心努力 による本邦唯一の服裝研究書である。 太古より現代に至る服裝の變遷を網羅し出 典正しき數十の挿圖は一日記事を明にした 我が國古來より傳はる作法中特に古典的代 表たる本膳の變遷につき一々詳説さる。 本膳變遷の食器を初め進擧の次第、食事の 作法、献立料理法のすべてを詳説す。
農業・商業參考書						
行發 社會資合式株書圖洋東 京東大						
番九三〇一京東管攝・地番九目丁三町錦區田神市京東 番六五五九三阪大管攝・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大						

【書圖洋東は書育教】

版五	刊新最	版重	刊新最	版五	版五	版六	版一十
大阪府立 清水谷高女 可愛ら しき 女子 縫方	奈良女高師裁縫研究會著 裁縫精義 送料價 〇・二六	奈良女高師裁縫研究會著 裁縫精義 送料價 〇・二六	廣島高師 石田ひろ先生著 裁縫教育の諸問題 送料價 〇・二六	東京女高師 松尾まきを先生著 裁縫學習の根本と其の實際 送料價 〇・二六	東京女高師 山形 寛先生著 手工教材 きびがら 送料價 〇・二六	奈良女高師 横井曹一先生著 兒童 粘土彫塑と木彫 送料價 〇・二六	奈良女高師 横井曹一先生著 手工學習原論と新設備 送料價 〇・二六
洋裁縫製教授の自學實習の手引參考書！	本書は引續き「洋裁精義」「羽織袴精義」と順次發表し以て裁縫科精義を完成す。	本書は引續き「洋裁精義」「羽織袴精義」と順次發表し以て裁縫科精義を完成す。	著者は廣島高師にて多年裁縫科研究の衝に當り其教育法は獨特の設備と共に有名。裁縫教育改善の諸問題二裁縫指導實際の諸問題三裁縫設備の諸問題を色繪にて説明	著者は東京女高師にて多年裁縫科研究の衝に當り其教育法は獨特の設備と共に有名。裁縫學習の根本と其の實際の諸問題を色繪にて説明	本書はきびがら細工の創始者山形先生の苦心研究による唯一の良書である。作品六十餘圖の挿圖は實物其餘の藝術味と雅致を有す。其の製作説明一々丁寧懇切。	學習主義に基く兒童生活の立體的表現なる粘土細工指導の新指針である。著者の作品など數多の寫眞を載せらる。	手工教育の全體に亘り其の本質を明かにし且新時代の手工を詳述した良書である。新手工の指導細目指導法を具體的に示し且新手工の理想的設備の實例と費用を示す。
行發 社會資合式株書圖洋東 京東大							
番七三〇一京東管攝・地番九目丁三町錦區田神市京東 番六五五九三阪大管攝・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大							

【書育教の書圖洋東】

刊新最	刊新最	刊新最	刊新最	刊新最	版二十	版八十	刊新最
理第二高校教授 市原哲治先生著 三角	理第二高校教授 田中保房先生著 座標幾何學	理第二高校教授 大石喬一先生著 代數	理第二高校教授 柴田 寛先生著 微分積分學 下巻	理第二高校教授 柴田 寛先生著 微分積分學 上巻	理第二高校教授 佐藤 充先生著 物理學 下巻	理第二高校教授 佐藤 充先生著 物理學 上巻	東京神大教授 寛之先生著 兒童心理學
送料 二〇六	送料 三〇〇	送料 二〇六	送料 四〇〇	送料 四〇〇	送料 三〇〇	送料 三〇〇	送料 二〇六

本書は高等學校大學教員指導書、文部省新制の高等小學校教科書に準じて編纂し、其全部を盡す。著者は、簿記要目制定委員の文部省局の構成指導者たる外、初等簿記自修書として又、良書各項に付し指導要項2要旨3準備4教材解説5指導方法に分ちて實際的に説明する。本書の兒童用生能用として松本喜一氏著「新簿記教科書」上巻下巻の初等教科書あり。

文部省制定の新高等小學校農科教授要目作成の委員が其趣旨により指導書を編纂する。指導の方法と内容の解説とを巧みに織りこみ、説明懇切、挿入多し、必要用具をも示す。一、要目を示し、二、各項は1教授要項2要旨と注意する準備4指導法内容解説とし、三、設問とす。

本書は文部省の商業教授要目案に準據し、其委員たる著者が商業科の教材及び指導法の解説として編纂された無二の指導書である。著者は、要目制定委員たる文部省局の構成者各項に付し指導の要項2要旨と注意する準備4教材解説と區別して詳細懇切を盡す。附録として下巻に商業科設備に付詳説す。

唯一の初等簿記指導書、文部省新制の高等小學校農科簿記要目に準據し、其全部を盡す。著者は、簿記要目制定委員の文部省局の構成指導者たる外、初等簿記自修書として又、良書各項に付し指導の要項2要旨3準備4教材解説5指導方法に分ちて實際的に説明する。本書の兒童用生能用として松本喜一氏著「新簿記教科書」上巻下巻の初等教科書あり。

高等教育心理學の精華、兒童心理に付詳説し、特に兒童の精神発達を力説す。専門學校、師範學校、保健、文檢受驗者、高師生、女高師生、小學校教師の優良参考書。

邦文物理學として最良書との定評の書「佐藤の物理」とは即ち本書である。内容は多年高等學校で自ら體験されたもので洗練し洗練され其最新發達の部面を詳説し又索引並に復習問題を特設す。

大學入學受驗者文檢受驗者師範學校專攻科生、師範中學女學工業學校先生の良参考書。高等學校及大學理科の教科書。

著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二高の數學主任全部の協力合著にて理論實際の兩方面共完備し類書中頭角を抜く名著。

内容の八大特色、一、全五冊互に相連關統一し、而も各筆者が得意に向つて徹底す。二、文部省高校要目に準據し時間的に合せ、而も詳細懇切を盡す。三、理論的著作にして類書中の白眉。四、多年の體験を合せ最も瞭解し易く、而も實力養成に徹す。五、最新發達の新數學の部分挿入す。六、あらゆる親切を盡し、自學自習に便し、七、復習問題練習問題を多く載せて至便。八、數學書として比較的安價にて買ひ易く、從て學生教科書に最も適す。

五大必讀書、(一)高等學校大學理科生。(二)大學入學受驗者。(三)高工其他專門學校生。(四)師範專攻科高師生。(五)文檢受驗者参考書。

發行 社會資合式株書圖洋東 京東大

番七三〇一東京管轄・地香九目丁三町錦區田神市京東
 番六五五九三阪大管轄・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大

【書圖洋東は書育教】

版八	版重	版重	版重	版五	版六	版八
東京神大教授 寛之先生著 兒童心理學	文部省主事 松本喜一先生 高橋福三先生共著 簿記指導書 複式簿	文部省主事 松本喜一先生 高橋福三先生共著 簿記指導書 單式簿	文部省主事 足達丑六先生共著 商業指導書 下巻	文部省主事 足達丑六先生共著 商業指導書 上巻	文部省主事 千葉敬止先生著 農業指導書 下巻	文部省主事 千葉敬止先生著 農業指導書 上巻
送料 二〇六	送料 二〇六	送料 二〇六	送料 二〇六	送料 二〇六	送料 二〇六	送料 二〇六

高等程度参考書

本書は高等學校大學教員指導書、文部省新制の高等小學校教科書に準じて編纂し、其全部を盡す。著者は、簿記要目制定委員の文部省局の構成指導者たる外、初等簿記自修書として又、良書各項に付し指導の要項2要旨3準備4教材解説5指導方法に分ちて實際的に説明する。本書の兒童用生能用として松本喜一氏著「新簿記教科書」上巻下巻の初等教科書あり。

文部省制定の新高等小學校農科教授要目作成の委員が其趣旨により指導書を編纂する。指導の方法と内容の解説とを巧みに織りこみ、説明懇切、挿入多し、必要用具をも示す。一、要目を示し、二、各項は1教授要項2要旨と注意する準備4指導法内容解説とし、三、設問とす。

本書は文部省の商業教授要目案に準據し、其委員たる著者が商業科の教材及び指導法の解説として編纂された無二の指導書である。著者は、要目制定委員たる文部省局の構成者各項に付し指導の要項2要旨と注意する準備4教材解説と區別して詳細懇切を盡す。附録として下巻に商業科設備に付詳説す。

唯一の初等簿記指導書、文部省新制の高等小學校農科簿記要目に準據し、其全部を盡す。著者は、簿記要目制定委員の文部省局の構成指導者たる外、初等簿記自修書として又、良書各項に付し指導の要項2要旨3準備4教材解説5指導方法に分ちて實際的に説明する。本書の兒童用生能用として松本喜一氏著「新簿記教科書」上巻下巻の初等教科書あり。

高等教育心理學の精華、兒童心理に付詳説し、特に兒童の精神発達を力説す。専門學校、師範學校、保健、文檢受驗者、高師生、女高師生、小學校教師の優良参考書。

邦文物理學として最良書との定評の書「佐藤の物理」とは即ち本書である。内容は多年高等學校で自ら體験されたもので洗練し洗練され其最新發達の部面を詳説し又索引並に復習問題を特設す。

大學入學受驗者文檢受驗者師範學校專攻科生、師範中學女學工業學校先生の良参考書。高等學校及大學理科の教科書。

著者の權威、本邦數理の府たる仙臺二高の數學主任全部の協力合著にて理論實際の兩方面共完備し類書中頭角を抜く名著。

内容の八大特色、一、全五冊互に相連關統一し、而も各筆者が得意に向つて徹底す。二、文部省高校要目に準據し時間的に合せ、而も詳細懇切を盡す。三、理論的著作にして類書中の白眉。四、多年の體験を合せ最も瞭解し易く、而も實力養成に徹す。五、最新發達の新數學の部分挿入す。六、あらゆる親切を盡し、自學自習に便し、七、復習問題練習問題を多く載せて至便。八、數學書として比較的安價にて買ひ易く、從て學生教科書に最も適す。

五大必讀書、(一)高等學校大學理科生。(二)大學入學受驗者。(三)高工其他專門學校生。(四)師範專攻科高師生。(五)文檢受驗者参考書。

發行 社會資合式株書圖洋東 京東大

番七三〇一東京管轄・地香九目丁三町錦區田神市京東
 番六五五九三阪大管轄・八二目丁一町寺堂安内・區南市阪大

【書育教の書圖洋東】

版六十	版重	刊新最	版五	版重	版五	刊新最
本位題 最 新 化 學	愛知一中 論 中山久吉先生著 送料價 〇・二〇	子女 物 理 學 講 義	大阪清水谷 高女 中村邦治先生著 送料價 〇・二六	生徒・兒童 用 書	實業 道 德 精 義	文部省 官 荻田萬一郎先生著 送料價 〇・二八
□ 受驗必勝の健實力錬捷徑の最良書として □ 過去二十ヶ年の高校其他入學試験問題を基 □ 過去二十ヶ年の高校其他入學試験問題を基 □ 過去二十ヶ年の高校其他入學試験問題を基	□ 女學生を本位とし判り易く親切に説き殊に □ 原理や定律には念を入れ應用を自在にした □ 現行女子物理學教科書を全部参照して参考 □ となるべき事項を殆んど網羅された。	□ 東西實業道徳研究の粹を悉く集め而も獨特 □ の見識を以て現代日本の實業道徳を詳述。 □ 高等商業學校其他實業專門校教科書に適す □ 實業道徳の鼓吹は實業振興の現代の要求。	□ 本書は著者が實際に各方面の工場管理法を □ 指導されたる多年の經驗的著述である。 □ 内容最も精細日親切平易を旨とし、學生無 □ 二の良参考書。且一般工場經營者の好同伴 □ である。	□ 奈良女高師文科講義に基き精選敷衍された □ る江戶文藝講義書。代表八大家文詳述。 □ 男女高師、女專、女學校高等科、高等學校 □ 師範專攻科並に文藝少壯者の最良参考書。 □ 他に類書なき唯一最良の中等學教育書。 □ 中等諸學校教師及文檢受檢者必讀の良書。 □ 中等學教育の各分野各問題に亘り其教授注 □ 意事項等悉く詳細に開明解決指示さる。	□ 内燃機入門の良書。各種内燃機圖の構造 □ と原理の大意を説き挿畫百餘行文平易の書 □ 工學學校教科書に適す。甲種乙種工業の教科 □ 書に適する様取材説明す高工其他の参考書 □ である。	□ 奈良女高師文科講義に基き更に解説敷衍を □ したる國文法講義。本書は奇に備せず各書 □ の採長補短。最も理中席の教育的著述。 □ 高師、女專、高等學校教科書、文檢参考書

東大 京阪 行發 社會資合式株書圖洋東

東京市田區三丁目九番地・東京總發。一〇三番七番
大阪市南區一丁目二番八番・大阪總發。三五九番六番

【書圖洋東は書育教】

版五	刊新最	刊新最	刊新最	刊新最	刊新最	刊新最	刊新最
高 等 國 文 法 講 義	奈良女高師 木枝増一先生著 送料價 〇・二〇	實 驗 高 等 化 學 講 義 下 卷	奈良女高師 清水與三郎先生著 送料價 〇・二〇	用 教 科 書 定 性 分 析	奈良女高師 藤井勇美先生著 送料價 〇・二〇	元 素 及 新 元 素	東北帝大教授 青山新一先生著 送料價 〇・二〇
□ 奈良女高師文科講義に基き更に解説敷衍を □ したる國文法講義。本書は奇に備せず各書 □ の採長補短。最も理中席の教育的著述。 □ 高師、女專、高等學校教科書、文檢参考書	□ 著者が海軍教授女高師教授としての體験記 □ 高等諸學校教科書文檢參考書に最適の新書	□ 實験を重視す一高等化學として既知の事項 □ と實驗の上に新事項を積みたる類例なき書 □ 著者が海軍教授女高師教授としての體験記 □ 高等諸學校教科書文檢參考書に最適の新書	□ 内容の三區分——各題目毎に(一)中學教育 □ にて學びし復習事項、(二)實驗事項、(三) □ 高等程度の新事項に分ち詳述さる。	□ 本書は工業學校、高等工業、高等學校の實 □ 驗用教科書として最良書。 □ 實驗室案内、分析手引として懇切至便。 □ 何處までも實際的なる處は本書の長所。	□ 地球形成の元素及新元素の發見苦心の跡悉 □ く開明さる。元素物語として珍貴なり。 □ 未發見の二種の元素の外悉く其發見の方法 □ により科學的に分類し詳解さる。	□ 著者は新界の大先輩。二高の神門として定評 □ 立體圖學・應用數學の姉妹篇刊最權威 □ 邦文圖書の最高級書。應用數學は天下第一品 □ である。	□ 著者は東北大學の碩著。二高を兼任し斯道 □ に定評ある專門權威家にて本書は其力作。 □ 礦物及地質學地學とす。努めて總合的に統 □ める態度にて取扱はれたる最新最良の名著 □ 上巻礦物下巻地質學。實際は主として上下 □ の内容を斯く分ち全體を總合的に地學とす □ 高等學校大學科教科書。大學入學受檢者 □ 高工業專門學校生、文檢受檢者良參考書

東大 京阪 行發 社會資合式株書圖洋東

東京市田區三丁目九番地・東京總發。一〇三番七番
大阪市南區一丁目二番八番・大阪總發。三五九番六番

【東洋圖書の教科書】

佐藤博士の物理	
<p>廣島大學教授 佐藤 充先生著 臨時定價 送料 〇・二五 中等新物理學教科書 上巻</p> <p>廣島大學教授 佐藤 充先生著 臨時定價 送料 〇・二五 中等新物理學教科書 下巻</p> <p>廣島大學教授 佐藤 充先生著 臨時定價 送料 〇・二五 中等新物理學教科書 合本</p> <p>廣島大學教授 佐藤 充先生著 臨時定價 送料 〇・二五 中等新物理學教科書 實驗帳</p>	<p>廣島大學教授 佐藤 充先生著 臨時定價 送料 〇・二五 中等新物理學教科書 上巻</p> <p>廣島大學教授 佐藤 充先生著 臨時定價 送料 〇・二五 中等新物理學教科書 下巻</p> <p>廣島大學教授 佐藤 充先生著 臨時定價 送料 〇・二五 中等新物理學教科書 合本</p> <p>廣島大學教授 佐藤 充先生著 臨時定價 送料 〇・二五 中等新物理學教科書 實驗帳</p>

著者は好評ある高等教育物理學の著者にて物理學界の新權威。
 生徒實驗を特に普通教科書中に挿入し一系統の下に排列す。
 實驗の成績のみを記入する爲別に生徒實驗帳を調製す。
 受験準備に適應する様に努む。
 文部省檢定済
 中學校用—昭和四、一、二七。
 師範校用—昭和四、一、一九。
 實驗帳は文部省檢定不用。

東大 東京
 東洋圖書株式會社發行
 東京市神田區三丁目九番地。電話一〇七三。
 大阪市南區一丁目二番八。電話九三九六。

【東洋圖書は教科書】

<p>神戶女子大學教授 神戶伊三郎先生著 臨時定價 送料 〇・二五 新動物學教科書</p> <p>神戶女子大學教授 神戶伊三郎先生著 臨時定價 送料 〇・二五 新植物學教科書</p> <p>神戶女子大學教授 神戶伊三郎先生著 臨時定價 送料 〇・二五 新礦物學教科書</p> <p>神戶女子大學教授 神戶伊三郎先生著 臨時定價 送料 〇・二五 新生理衛生教科書</p>	<p>清水與三郎先生著 臨時定價 送料 〇・二五 新化學教科書</p> <p>清水與三郎先生著 臨時定價 送料 〇・二五 新化學實驗書</p>
--	---

奈良女高師代表教科書。
 最新女子教育の發達に恰適の良書。
 自學自習實力鍛錬に便利。
 五年制女學校には最も都合の教科書。
 四年制の女學校には教材の省略表により取扱ひ易くし、自ら自習自習心を養ふ様にす。
 文部省檢定済—昭和四、一、一九。
 實驗書は文部省檢定不用。

神戶教授の女子博物新教科書四冊完成。
 本書の特色
 一、女子教育の向上に伴ひ内容を豊富にす
 二、自學自習を加味し記事多く文章平易。
 三、實事實物に即し觀察實驗の指導を兼ね
 四、挿畫精選生發發生等の圖多し。
 五、歸納的學習心理の新説に立脚し教材の排列に工夫生徒の學習程度に合ふ。
 六、生物の進化動物の系統を明にす。
 七、産業に關する記事多く家材料と連絡
 八、小學校の理科と密接の連絡を取る。
 文部省檢定済
 新動物 昭和四、一、二
 新植物 昭和五、一、三〇
 新礦物 昭和五、一、三三
 新生理 昭和五、一、三〇

奈良女高師代表教科書。
 最新女子教育の發達に恰適の良書。
 自學自習實力鍛錬に便利。
 教師用書は獨特の工夫を凝らす。
 新圖書指導手引 自律創造の餘地を置き、面も國家全般の原則を引例説明したる良書。
 基本より應用迄 十二章二百五十六圖あり
 新時代の要求 殊に女子に必要檢定不要。

東大 東京
 東洋圖書株式會社發行
 東京市神田區三丁目九番地。電話一〇七三。
 大阪市南區一丁目二番八。電話九三九六。

【覽台賜の下殿族皇】

奨推御會溪茗・定認御省部文
一チリソーオの物讀童兒

料資習學 書全科百童兒

奈良女高師前教授 清水牛吾先生著 兒童の天文學	奈良女高師前教授 西田興四郎先生著 兒童の地理學	奈良女高師前教授 桑野久任先生著 兒童の生理學(活動篇)	奈良女高師前教授 桑野久任先生著 兒童の生理學(藥養篇)	奈良女高師前教授 神戸伊三郎先生著 兒童の植物學	奈良女高師前教授 神戸伊三郎先生著 兒童の昆蟲學	奈良女高師前教授 神戸伊三郎先生著 兒童の動物學(鳥類篇)	奈良女高師前教授 神戸伊三郎先生著 兒童の動物學(獸類篇)	奈良女高師前教授 神戸伊三郎先生著 兒童の植物學	奈良女高師前教授 神戸伊三郎先生著 兒童の植物學
----------------------------	-----------------------------	---------------------------------	---------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	----------------------------------	----------------------------------	-----------------------------	-----------------------------

第一分冊十二冊完以下刊
兒童書用中最も教育的なものと評定
兒童書用中最も卓絶せしものと評定
兒童書用中最も切實なものと評定

第一分冊十二冊完以下刊
兒童書用中最も教育的なものと評定
兒童書用中最も卓絶せしものと評定
兒童書用中最も切實なものと評定

東洋圖書株式會社發行

東京市神田區三丁目九番一〇番七
大阪市南區一丁目二番八番六

二 十 冊 完 成

□學校學級家庭必須の良書—學校圖書館、兒童文庫、優良兒童の友として責任を以てお勤めし得る良書

□最良童書選集—印刷鮮明、紙質上等、挿畫豊富、體裁藝術的、製本堅固優美、日本一の東洋圖書式

【覽台賜の下殿族皇】

奨推御會溪茗・定認御省部文
一チリソーオの物讀童兒

料資習學 書全科百童兒

奈良女高師前教授 及川久太郎先生著 兒童の物理學	奈良女高師前教授 及川久太郎先生著 兒童の物理學	奈良女高師前教授 及川久太郎先生著 兒童の化學	奈良女高師前教授 及川久太郎先生著 兒童の氣學	奈良女高師前教授 仲本三三先生著 兒童の算術	奈良女高師前教授 仲本三三先生著 兒童の算術	奈良女高師前教授 仲本三三先生著 兒童の算術	奈良女高師前教授 仲本三三先生著 兒童の算術	奈良女高師前教授 仲本三三先生著 兒童の算術	奈良女高師前教授 本枝増一先生著 兒童の國文學
-----------------------------	-----------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	----------------------------

第一分冊十二冊完以下刊
兒童書用中最も教育的なものと評定
兒童書用中最も卓絶せしものと評定
兒童書用中最も切實なものと評定

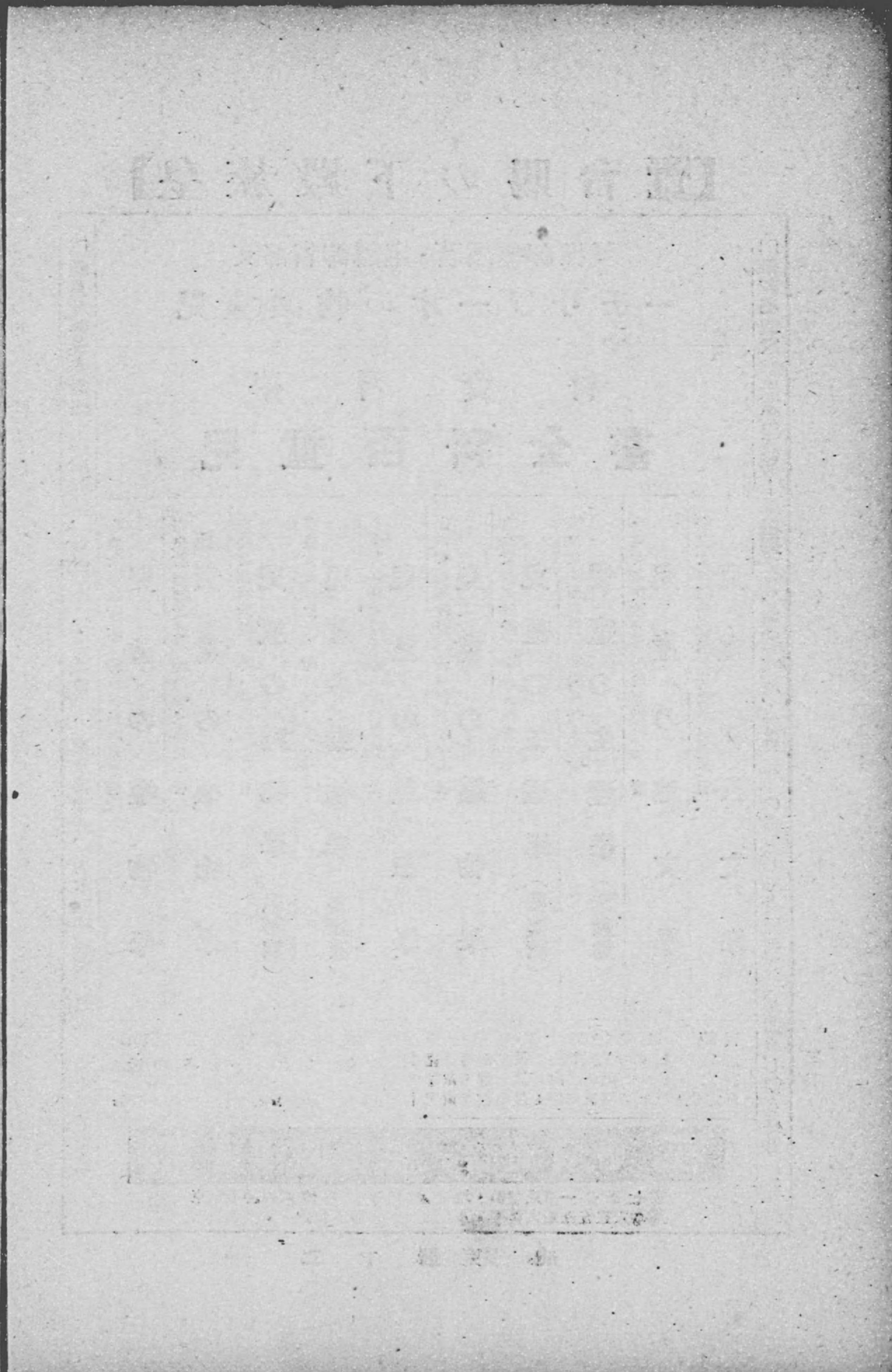
第一分冊十二冊完以下刊
兒童書用中最も教育的なものと評定
兒童書用中最も卓絶せしものと評定
兒童書用中最も切實なものと評定

東洋圖書株式會社發行

東京市神田區三丁目九番一〇番七
大阪市南區一丁目二番八番六

二 十 冊 完 成

□本邦唯一の兒童教科書—各册五十音順の索引付にて必要な事項を隨時取調べ得る至便至實の良書



2533
529

